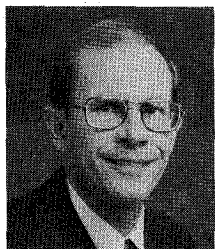
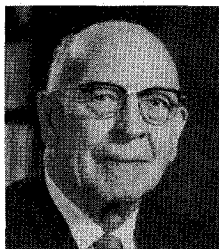




# 聖徒の道

2 1983



## 末日聖徒イエス・キリスト教会

### 大管長会

スベンサー・W・キンボール  
 マリオン・G・ロムニー  
 ゴードン・B・ヒンクレー

### 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
 マーク・E・ピーターセン  
 リグランド・リチャーズ  
 ハワード・W・ハンター  
 トーマス・S・モンソン  
 ボイド・K・バックナー  
 マービン・J・アシュトン  
 ブルース・R・マッコンキー  
 L・トム・ベリー  
 デビッド・B・ヘイト  
 ジェームズ・E・ファウスト  
 ニール・A・マックスウェル

### 顧問

M・ラッセル・バラード  
 ローレン・C・ダン  
 レックス・D・ビネガー  
 チャールズ・A・ディディエ  
 ジョージ・P・リー  
 F・エンツィオ・ブッシェ

### 編集長

M・ラッセル・バラード

### 国際機関誌

編集主幹：  
 ラリー・A・ヒラー  
 編集副主幹：  
 デビッド・ミッチェル  
 子供の頁編集：  
 ボニー・ソーンダース  
 デザイナー：  
 ロジャー・ギリング  
 制作：  
 ノーマン・ブライス

## も く じ

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| 「自分の命を救おうと思う者は」…ゴードン・B・ヒンクレー…………… | 1  |
| 忘れ得ぬ夏……………アルマ・J・イエイツ……………         | 9  |
| 神のみ言葉……………タミー・ラベナ・トビン……………        | 13 |
| 批判に対処する……………ダン・ワークマン……………         | 16 |
| 「もしラッパがはっきりした音を出さないなら」…ウェイン・B・リン… | 22 |
| リグランド・リチャーズ……………ルシール・C・テイト……………   | 24 |
| 戦士ポインティング・アイアンの聖餐式…リン・L・ライト……………  | 34 |
| 「高慢と偏見」……………スーザン・エバンズ・マックラウド…     | 36 |
| モルモネード……………                       | 47 |
| こころの歌……………ハイゼル・エム・トムソン……………       | 48 |
| ひふてわかるってすばらしい……………ベッツィー・オバンド…………… | 52 |
| わたしのお友だちへ……………ジーン・アール・クック長老……………  | 54 |
| せいさん……………マリーン・エバート……………           | 58 |
| タナー副管長逝去さる……………                   | 60 |
| タナー副管長逝去に関する大管長会声明……………           | 65 |
| チャーチニュース・ローカルページ……………             | 66 |

1983年2月号 聖徒の道 第27巻第2号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
 東京都港区南麻布5-10-30  
 電話 03-440-2351

制作・配送 東京ディストリビューション・センター  
 東京都世田谷区上用賀4-9-19  
 電話 03-427-4311

印刷所 株式会社 精興社  
 定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)  
 半年予約1,100円(送料共)  
 1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA 0540JA Printed in Tokyo, Japan.

© 1983 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

定期購読は、「聖徒の道用予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会・東京ディストリビューション・センター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届け先の変更がありましたら、早急にTDCにご連絡下さい。

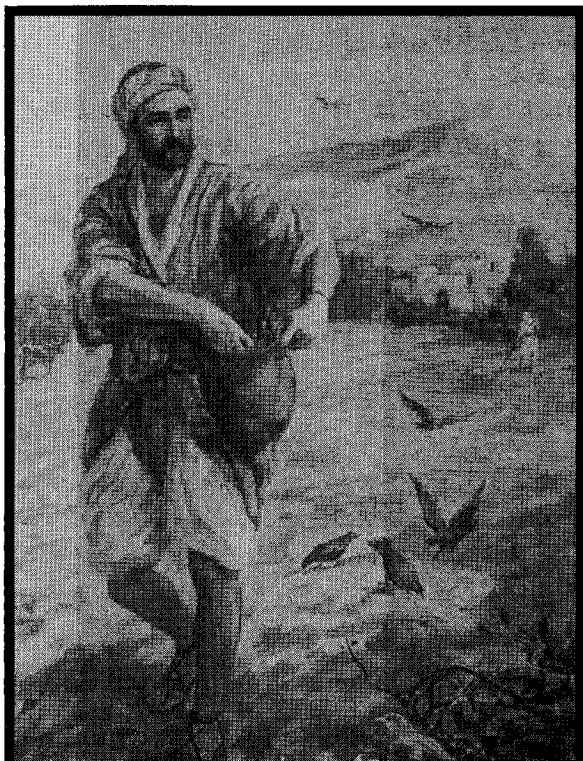
何年か前のある日曜日、私はアイダホの小さな町の、あるステーク部長の家で朝を迎えました。朝の祈りの前に家族がそろって、聖典を少し

読みました。その時読んだ聖句の中に、ヨハネ12：24のイエスのみ言葉があります。「よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ

## 「自分の命を 救おうと思う者は」

第二副管長 ゴードン・B・ヒンクレー

地にまかれ、死ななければ、種が実を結ばないように、私たちも自分の命を捨て、奉仕することによって生きなければならない。



© Providence Lithograph Company 1957

ば、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」

ここで主が、来るべき御自身の死について語られたことに疑いの余地はありません。死なくして、御自身に課せられた使命は何も果たせないということを言われたのです。しかし、この言葉の中には、もうひとつ別の意味があります。主は私たち一人一人に、自分を捨てて他の人のために働くのでなければ、人生には何の意義もないということを言っておられるように思えます。それは、主が次のように言葉を続けておられることからわかります。「自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう。」(ヨハネ12：25) ルカによる福音書には「自分の命を救おうとするものは、それを失い、それを失うものは、保つのである」(ルカ17：33)と書かれています。別な言い方をすると、自分のことだけを考へて生きる人は衰え、死んでいくが、自分のことを忘れて人のために働く人は、現世においても永遠の世界においても進歩成長していくということです。

私が泊まらせてもらった家の主であるそのステーキ部長は、その日の午前中、ステーキ部大会において、13年にわたって忠実に務めてきた責任を解かれました。すべての人が心からの愛と

感謝の気持ちを表わしましたが、それは彼が金持ちだったからでも、優れた実業家だったからでもありません。彼が行なってきた素晴らしい奉仕の業の故だったのです。彼は自分自身のことは忘れて、寒暑を問わず、人々のために奔走しました。実際、彼が他の人のために費やした時間は膨大なものでした。彼は助けを必要としている人々のために、自分のことは二の次にしました。それによって、彼は生き生きとした毎日を過ごし、自分が仕えた人々から敬われるようになったのです。

その朝、新しいステーキ部長が召され、多くの人々がその就任を喜びました。しかし、最も喜んだのは、ステーキ部書記の席に座っていた、郵便配達を仕事とする兄弟でした。彼は12年前、まったく不活発な隣人に対して、もう一度教会に戻るよう、地道に、そして忍耐強く働きかけました。

教会に対して何の関心も示そうとしないその隣人をそのままにしておくことは非常に簡単なことだったと思います。その郵便配達の兄弟にとっても、自分自身の静かな生活を守るだけのことなら、それはとても楽なことだったでしょう。しかし、彼は自分のことは二の次にして、隣人に目を向けました。その日曜日、偉大なシオンのステーキ部の立派な指導者として召された人の陰には、この兄弟の働きかけがあったのです。人々が新しいステーキ部長を



支持する挙手をした時、書記席にいたその郵便配達の兄弟の目には感謝の涙があふれていました。彼は自分以外のところへ目を向けることによって、その朝ステーキ部長として支持された兄弟の人生に喜びと目標を与えたのでした。

フィリップス・ブルックスは「多くの人はその死と共にほとんど忘れられた存在となってしまうが、一方、己を忘れ、人のために尽くしたごく少数の人々は、その名を不朽のものにしている」という至言を残しています。

南インドのある友人を訪ねた時のことを思い出します。私たちが彼と初めて会ったのは、12年前、だれかバプテスマを施してくれる人を派遣して欲しいという彼の要請に答えて、南インドへ行った時のことでした。彼はその要請をよこす10年前、教会から出された1冊の伝道用パンフレットを手に入れました。しかし、それがだれの手を経て、どのようにしてその地へ入ってきたのかはわかりませんでした。彼はソルトレーク・シティーの教会本部へ手紙を書きました。教会から他の出版物が送られ、彼はそれを読みました。

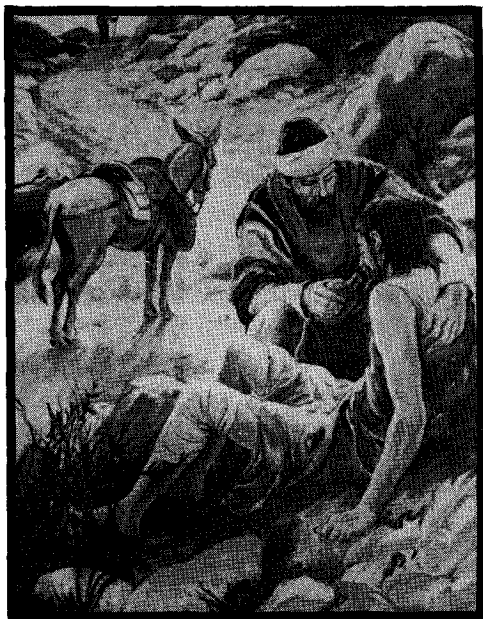
彼に最初に会った時、私たちはバプテスマを施しませんでした。まだ準備ができていなかったのです。私たちは彼に福音を教える手はずを整え、何カ月か後、彼はバプテスマを受けました。

この人は、あるセメント工場で經理

の仕事をしていました。住む家も狭く、薄給でした。しかし、彼には物惜しみするところがなく、他の人のために働きたいという強い気持ちを持っていました。イエス・キリストの福音を理解することによって、人々に対する大きな愛を身につけた彼はひとつの学校を建てました。貯金をはたいて買い入れた土地に、自分自身の手で建てたのです。それは質素なもので、決して立派な建物ではありませんでした。しかし、400人の子供たちがそこで学び、文盲の闇を抜け出し、知識の光の中へ足を踏み入れてきたのです。これまでこの愛の行ないが彼らの生活の中に何をもたらし、これから何をもたらししていくかは測り知ることができません。

このひとりの人の働きを通して、南インドのいなかに教会の小さな支部が5つ開かれました。会員たちは清潔で小ざっぱりした小さな建物を数軒建てました。それぞれのドアには、英語とタミール語で「末日聖徒イエス・キリスト教会」と書かれています。床はコンクリートを打ただけで椅子はありません。彼らはそこで、私たちと同じように共に集って座し、証をし、主の晩餐の聖餐にあずかりました。

膨大な人口を抱えるインドの中で、今教会員の数は200を少し越えただけです。いつか、だれかがインドにおけるこの教会の歩みを綴るでしょうが、自分を捨てて人々のために働いた私の



それは自らの意志で  
意義ある奉仕の業を  
行なうための力です。

その友人に関してひとつの章をさくのでなければ、それは完全な歴史を伝えることはできないと思います。

私たちはその旅の途中、前にブリガム・ヤング大学で教鞭をとっていたもうひとりの友人に会いました。当時彼の子供はすでに一人前となっていて、彼は奥さんと共にひとつの決断を下しました。ほとんどの人は退職すると、のんびりした生活にひたってしまいます。この夫婦もその気になればできました。しかし彼らは別の道を選ぼうとしました。この世界の中に、天父の子供たちに救いの真理を教える場を求めようとしたのです。

そして彼らはそれを見だし、美し

い家や自動車を売り、友や肉親と別れ、より厳しい環境の異郷の地へ行きました。水の上にパンを投げた（伝道11：1）このふたりに、主は他の人々を教え、啓発し、助ける機会を与えられました。ふたりがしていることの結果がどういう形になって表われるか、それはだれにも言うことができません。

多くの人が働きの手をゆるめ、休息を取りたいと思うその時に、住みなれた家、社会、そして友を後にしたこの夫婦のことを考えながら、私は主が語られた次の言葉を思いました。「おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠

の生命を受けつぐであろう。」(マタイ 19:29) 自発的に働きを申し出たり、伝道に出て主のために働くようにという呼びかけに応えた人々の中には年輩者、独身者、既婚者など様々いますが、このような人々に会った時に必ず頭に浮かんでくるのがこの聖句です。

私たちはこのような人々を必要としています。主も求めておられます。世の人々も彼らを必要としています。そして、この素晴らしい兄弟姉妹たちにも、あの祝福に満ちた経験が必要なのです。おおまかな言い方も知れませんが、私が知る中で最もかわいそうな人とは、自分のことしか考えられない人です。逆に最も幸福なのは、自分を捨てて、他の人々のために働いている人です。

ある大学を訪ねた時のことです。私はその学生たちからどこへ行っても出てくるありふれた不平不満を聞かされました。学業が、知識を得るという恵まれた機会ではなく、何か重荷のようなもので、非常に苦痛だというつぶやき、住む所や食べる物についての不平不満などです。

学業が苦痛に感じられて仕方がないという若人、住む所や食べる物に満足できないでいる人々に、それらの問題への処方箋しよほうせんを与えたいと思います。しばらく本を離れ、自分の部屋から出て、年老いて寂しい暮らしをしている人、病に苦しむ人、失意に沈む人々の所を

訪問してみるとよいでしょう。自分の生活に対する不平不満が出てくる時というのは、総じて、自分のことしか考えていないのです。

私がよく行く靴の修理店の壁には、大分昔から1枚の看板が掛けられています。こうあります。「私は靴を持っていなかった。だから、足のない人に会うまで不平を言っていた。」自分を甘やかすという病気に一番よく効く薬は、自分を捨てて、他の人に仕えることです。

自分は結婚できるだろうかとひどく思い悩んでいる若い兄弟姉妹がいます。言うまでもなく結婚は素晴らしいものです。結婚には、それを求め、そのための努力を払う価値があります。しかし、それについてくよくよ考えても、何が変わるわけでもないのです。実際、それは逆効果になるだけです。悲観的なものの考え方ほど、人格を下げてしまうものはありません。ある人は現世において結婚することがないかも知れませんが、しかしそういう人たちに覚えておいて欲しいことがあります。それでも人生は、自分が考える以上に豊かで、生産的で、楽しいものにすることができのです。その喜びを得るための鍵は、人のために奉仕することです。

主の神殿の中で行なわれる聖なるみ業に喜んで自分の時間を捧げて下さる人々を賞賛したいと思います。神殿の中では、無私の奉仕の真の姿を見ることが出来ます。数え切れない人々が死

者のために莫大な時間と労力を捧げていますが、私はこれを現代の奇跡のひとつと考えています。この奉仕の業に携わる人々は、その働きを通して、安らぎと喜びが得られることを知っています。この素晴らしいみたまの恵みは、文字通り、私たちの心の病の多くを癒す薬となります。このような経験を通して、私たちは、人に奉仕する時こそ主に仕えているのだということを理解するのです。

この神権時代に主は次のように言われました、「われ誠に汝らに告ぐ、人は努めて善き業に従い、多くの事をその自由意志によりて為し、多くの正しき事を為し遂げよ。」そして、非常に重要な言葉を次のように続けられました。「そは人自らの中に自由の意志ありて……」（教義と聖約58：27—28）

兄弟姉妹、私たち一人一人には自由意志という力があります。それは私たちが熱心に努め、自らの意志で意義ある奉仕の業を行なうための力です。

エマーソンは、立派な組織というもの、偉大な人物の投影に過ぎないと言いました。私は自分が担当してきた地域で、素晴らしい業を成し遂げてきた人々を幾人か思い起こす時に、そのことを感じます。韓国には現在7つのステーク部と3つの伝道部がありますが、これはある意味で、キム博士と、ニューヨークのコーネル大学に留学中の彼に福音を教えたふたりの青年、オ

リバー・ウェイマンとドン・C・ウッドが投げかけた長い影と言うことができます。ふたりの若者は韓国から来たこの学友にモルモン経を読むように働きかけたのです。ふたりがキム博士に寄せた関心、共にした行動は、彼らがコーネル大学で学んでいたことの動機とはまったく別のものです。3人はそれぞれに、寸刻を惜しんで、学位取得目指して勉強していました。しかし、彼らは互いに教え、学ぶ時間を作ったのです。キム博士はニューヨーク州のイサカで礼拝行事に出ていましたが、博士号を取得して故国へ帰る時には、モルモン経とこの教会に対する愛も携えていたのです。朝鮮動乱に従軍した末日聖徒の軍人たちも、戦友の韓国兵たちに福音を伝えました。この信頼できる学者キム博士は、日本からの宣教師派遣などを含めて、韓国における主のみ業を進める大きな力となりました。彼はすでに故人となりましたが、み業は堂々と進み、「朝なぎの国」韓国で、変わることなく、さらに多くの人々の心に感動を与えています。

フィリピンには現在5万5千人以上の会員がいて、16の強固なステーク部と4つの伝道部があります。世界的に見ても改宗者の多い地域です。フィリピンの教会の歴史は、マクシーン・グリムを抜きにして語ることはできません。ユタ州トゥーエル出身の彼女は第二次大戦中、太平洋地域で赤十字活動

に携わりましたが、アメリカ軍将校と結ばれ、戦後はマニラに家を構えました。彼女は人々に福音を伝えるために、宣教師の派遣を要請するなど、数多くの働きをしました。彼女の夫も法的な手続きを行なったり、宣教師入国を実現させるために、ほかにもたくさんのことをしました。彼らにとって、自分たちだけのことを考え、お金を稼ぎ、快適な暮らしをすることは、いとまたやすいことでした。しかし、グリム姉妹はこの国に福音を広めるための働きをやめませんでした。

当時、私はアジア地域を管理する責任にあり、彼女の訴えを大管長会に伝えました。そして1961年、この国で伝道の業を開始することが正式に決定されたのです。1961年5月、私たちはフィリピンで集会を開き、み業の第一歩を進めました。集会を開くための場所がなく、アメリカ大使館の許可を得て、マニラ郊外のアメリカ軍人の共同墓地でそれを行ないました。

自由のために命を捧げた5万人以上の戦死者が眠るその場所で、私たちは朝の6時半に集まりました。グリム姉妹が戦時中に持ち運んでいた携帯用の小さなオルガンを演奏し、私たちはこの異郷の地でシオンの歌を歌いました。私たちは共に証を述べ、始まったばかりの業の上に天より祝福が注がれるように祈りました。その時、フィリピン人の会員はたったひとりしかいません

でした。

それは驚くべき業の幕開けであり、奇跡の始まりでした。そして、その後に歴史が続き、時に意気消沈し、時に輝かしい発展を見てきたのです。7年前、私はキンボール大管長や他の幹部と共に、この地の地域大会に出席しました。この時にフィリピン最大の屋内集会場アラネット・コロセウムに集った人は約1万8千人を数えました。

私は過去の日々を思い、涙しました。そして自分の楽しみをまったく後回しにして、自分が住むその国に教会が確立される日を夢見、多くの素晴らしい人々に彼らがまだ味わったことのない幸せを教えるために、うむことなく働いたあの女性を感謝の念と共に思い起こしていました。

自分もフィリピンのような異郷の地にいたら、彼らと同じようにすると言う人がいるかも知れません。確かにそうかも知れません。しかし、考えてみると、この地上にある様々な場所というのは、その人次第で遠い異国とも、見あきて何の感動も湧かない風景の所ともなるのです。

国、町を問わず、またどのような家庭でどのような生活をしているかにかかわらず、他の人に関心を向け、手を差し伸べる機会はどこにでもあります。

心に喜びを持ち、主のみたまが共にある生活をしたと思うなら、己を捨て、他の人に手を差し伸べようではあ

りませんか。これは私の心からの願いです。自分自身のことを後にして、人に奉仕するなら、福音につける主の大なる約束が真実であることを知でしょう。

「自分の命を救おうと思う者はそれを失う。すなわち、自分の命を救おうと思う者はわたしのために喜んでそれを捨てる。そして、もしわたしのために喜んでそれを捨てようとしなければそれを失う。

しかし、わたしのため、また福音の

ために喜んで自分の命を捨てる者は、それを救うであろう。」(ジョセフ・スミス訳マルコ8:37-38)

これらの言葉は、主が初めて語られた時と同様、今も真実であることを証します。父なる神が生きておられること、また、イエスがキリストであり、この世の救い主であることを証します。そして、他の人に助けの手を差し伸べるなら、皆さんは自分自身の本当の姿を知り、この世界に大きな祝福をもたらすようになることを証します。

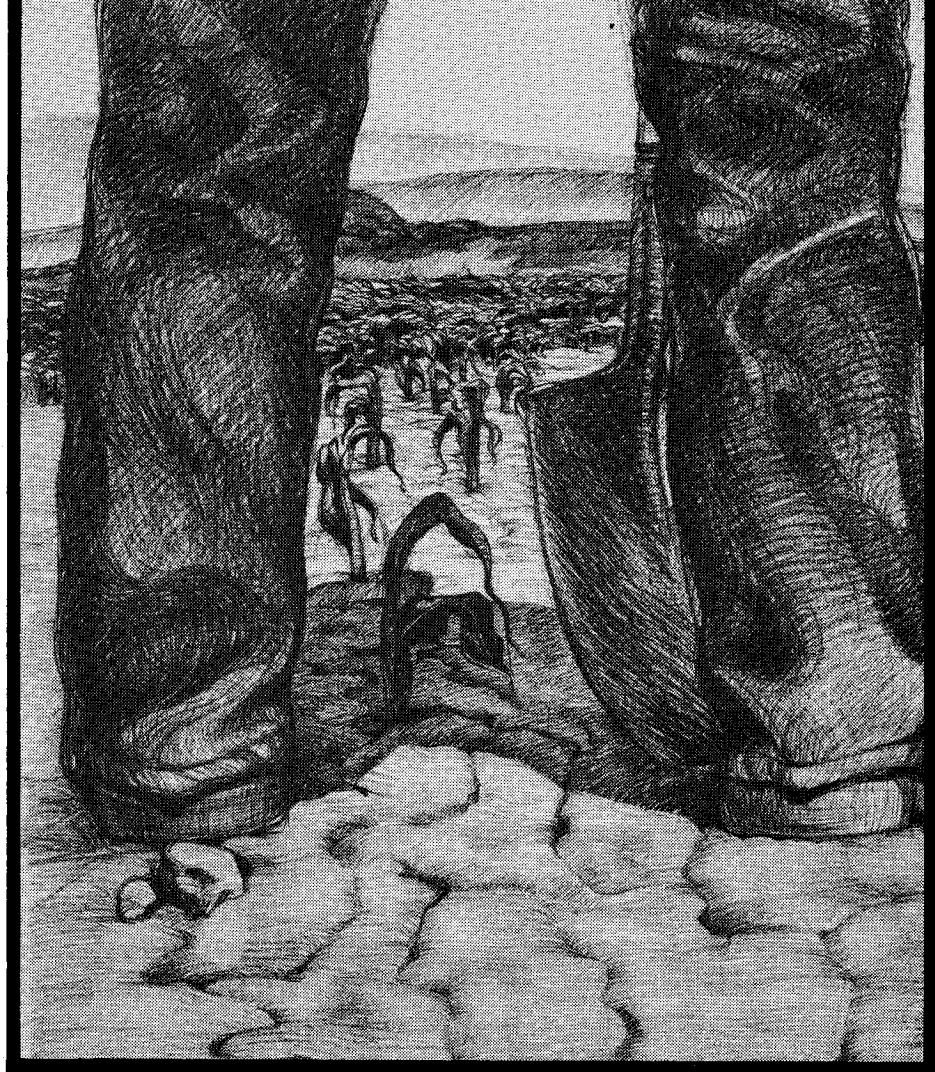
## ➔ ホームティーチャーへの提案

強調点：ホーム・ティーチングの際、以下の点を強調するとよい。

1. 最も幸福なのは、自分を捨てて、他の人のために働く人であり、最も不幸な人は、自分のことだけを考えている人である。
2. 不平や不満が絶えない生活をしているとしたら、それは自分のことだけを考えているからである。
3. 自分自身を甘やかすという病気に効く最も良い薬は、自分を捨て、人のために働くことである。
4. 人に仕えることは、すなわち神に仕えることである。
5. どのような国、町、家庭で、どのような生活をしているかにかかわらず、人のために働く機会は至るところにある。

## ➔ 話し合いのための提案

1. 奉仕によって得られる祝福について、自分の気持ち、経験したことを話す。
2. このメッセージの中に、家族が朗読したり話し合ったりするのによい聖句や引用句はないだろうか。
3. 訪問する前に、家長と話し合っておく必要がないだろうか。定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージがあるだろうか。



# 忘れ得ぬ夏

アルマ・J・イエイツ

**私**は父の信仰に疑いを抱いたことは一度もなかった。父の信念は父の人生そのものであり、どんな試練や逆境やチャ

レンジにも揺らぐことはなかった。

まだ子供の頃、私たちはユタの小さな農場に住んでいた。生活は苦しく、仕事は山



のようにあった。そうした少年時代、私にとって夏はこのほかつらく思われた。骨の折れる畑仕事に来る日も来る日も続くのである。ビートの間引き、とうもろこし畑の草取り、用水路の掃除。やっかいな雑草は取っても取っても生えてきた。干し草にする牧草を運ぶ仕事もあった。

夏中ずっとそのような仕事が続く中で、心を慰めてくれる唯一のオアシスは安息日であった。私たちは皆、日曜日が主の日であることを知っていた。草取りも、牧草の刈り入れも、穀物の取り入れも、し残した仕事はすべて月曜日を待って行なった。

安息日に仕事を休むのは、道具も出さず畑にも出ないから楽とばかりは言えなかった。いろいろな問題があった。実際、夏は経済的な安定を確保する上で最も大切な時期だったからである。短い夏の間には作物が順調に生育しなければ、長い冬を越すのは非常に困難であった。だから作物は何としても順調に育てなければならなかった。そして、ほとんどの場合、この適度の繁栄のかぎとなるのは水であった。ユタは水に乏しく、雨らしい雨はめったに降らない。それで冬と春の貯水には特に気をつかい、暑く、雨の降らない夏の間、慎重に給水していかなければならなかった。

どこの農場も灌漑用水路に依存していた。この命の水を運ぶ用水路にすべてがかかっていた。灌漑はどうしても必要だったが、安息日を守るかどうかの困難な立場に立たされることもあった。畑に水を引く順番は、月曜日の年もあれば火曜日の年もという具合に、何年かごとに曜日が変わるのである。そこで時には日曜日に順番が回ってくるこ

ともあった。農家は自分で選ぶことができなかったのである。

他のみんなと同じように、父にも何年かの間、日曜日の番が回ってきた。安息日を聖とするという父の決意にいつも強い印象を受けていたせいとか、その数年のことはよく覚えている。主は父の心を御存じであったし、父やほかの農家の人々がどんな状況の下で働いているかも御存じであった。だから、たとえ日曜日に畑に水を引いたとしても、主はそのことで父をとがめたりはされなかったかもしれない。しかし、父はその仕事さえ避けたいと思っていた。父は、灌漑のスケジュールを作られたのは主であり、主の安息日に順番が回ってくるはずがないと確信していた。父が主の聖日は破らないという自分の決意を明かすのを耳にしたことは一度もないが、父の生き方にそれが表われていた。

父の順番が日曜日になった時、父はあらゆる手立てを尽くして安息日に灌漑することを避けた。金曜日と土曜日、父は上流の農家で利用されていない水がないか、用水路を見るのが習慣であった。父は用水路から流れ込む一滴の水もむだにしなかった。そして、日曜日が来る前の内に畑の灌漑を終えていた。私は父から主の日に働くように言われた記憶がない。その結果、父の仕事は増えることになったが、安息日に休むことができるならと進んで犠牲を払っていた。

こうしていつも何とか切り抜けてきたように思えた。ずっと父を見ているうちに、父の献身と決意は私にとって、主は戒めを守ろうと努力する者を祝福されるという証

になっていた。

その後、父の信仰を試す大きな試練の年がやってきた。その年は、焼けつくような夏が例年より早く来て、干ばつのきざしが見えていた。炎天の日が続き、太陽はすべてのものを焦がし、芝生も、庭も、畑も焼けつくような日射しにしおれていた。そして、よりによってこの最悪の年に日曜日に水を引く番が回ってきたのである。畑は水を必要としていた。しかし、その水は金曜日にも土曜日にも上流からは一滴も流れてこなかった。畑は日曜日になっても乾いたままだった。

ある日曜日の朝、母はひどく心配して父に言い出した。「ジョセフ、用水路から水を引いた方がいいんじゃないかしら。せめて芝生と野菜畑だけにでも。枯れかかっているんですもの。」

実際、芝生も野菜畑も枯れかかっていた。水がなくて何もかも枯れかかっていたのである。選択の余地はなかった。畑には水を引かなければならなかった。父がその日に引かなければ次の日曜日まで水は使えないことになっていた。そうなれば畑は1週間ともたなかった。

そこで、日曜日の集会に出席する身なりを整える前に、父はシャベルを肩にかついで家を出て行った。父は日曜日の朝に山を登って行くことにひどく失望したに違いない。これまでずっとこの仕事をしないで済むように努力してきたのに、今になってそれをせざるを得ないところに追い込まれていた。私たちは、主が父をとがめられることはないと確信しながらも、天父はきっと父に対して、他の方法を見いだすことを望ん

でおられるのではないだろうかと思っていた。

父は灌漑用水路にたどり着くと、いつもの場所にカンバスでせきを作ったが、ほかに何をするでもなく、じっと用水路に身をかがめて、考え込んでいた。自分は何をすべきなのか。父は、安息日を守るようにという主の戒めをじっくり考えた。自分はこの戒めを本当に信じているのだろうか。口先だけでなく、身をもって示しているだろうか、と。

瞑想にふけっている間に、父はひとつの音がするのを聞いた。それは心を揺さぶる強烈なものであった。父はそれを生涯忘れることがなかった。「せきを取り除き、シャベルと道具をしまいなさい。あなたのために私が責任をもって引き受けよう。すぐにはないかもしれないが、私が世話をする。この夏は私にまかせておきなさい。私が備えよう。」

父は姿勢を正した。あたりにはだれもいなかった。顔を上げると、空は青く澄み渡り、雲ひとつなかった。そして乾いたそよ風が吹いて、息苦しい不快な1日になりそうだった。

灼熱しやうねつの太陽が照りつけて、地面はからからに乾ききっていたが、父はカンバスのせきを上げると、用水路から家に帰った。父は何をすべきか命じられていた。そして、それを理解していた。自分がどんな形で助けを受けることになるかはわからなかったが、約束を受けたことは事実であった。父は身なりを整えると、畑のことは父が生涯信頼してきた御方の力に任せて、日曜日の集会に出かけて行った。

集会から帰宅した時も、相変わらず空に

は雲ひとつなく、うだるような暑さだった。草木は照りつける太陽ですっかりしおれ、雨が降る気配はまったくなかった。母はまだ野菜畑のことがひどく心配らしく、再び父に言った。「雨になりそうな様子はまったくないし、野菜畑の方はどうなさるつもりなの？」父はその朝の経験を母に話していなかったのだ。

再び父は山を登って灌漑用水路まで行った。父は自分のしていることを思うと悲しかった。気の進まないまま用水路をせき止めた父は、ふと自分の信念がぐらついていることに驚きあきれた。「お前の信仰はどうなっているのか。」父は厳しく自分に問いかけた。

決意を新たにした父は、用水路からせきを外して山を下りた。二度と安息日に用水路に行くことはすまいと決心しながら。

山を下りながら、空を見上げると、雲が出始めていた。そして、1時間としない内にどしゃ降りの雨になった。干あがっていた地面は必要な水分を吸収して、芝生も、野菜畑も、畑も、一気によみがえった。

その雨は奇跡だったが、それは始まりにすぎなかった。夏はまだ始まったばかりだったのである。うだるように暑い7、8月はこれからだった。しかし父は、律法を授けられ、それに従う道を備えて下さる御方の約束を受けていたので、何も心配していなかった。

翌週になって、近所の人々が父に、日曜日の灌漑の番を一部土曜日と交換してもらえないだろうかと言ってきた。もちろん父は喜んだ。土曜日のわずかな時間でも、芝生と野菜畑に水を引くことができる。それで

もその時間だけでは、広いとうもろこし畑と麦畑、それに牧草畑を灌漑するのは無理だった。しかし、主は別の方法で父を祝福して下さった。夏の間ずっと定期的に、それも雨が最も必要な時にだけ雲がわき、雨が降って、作物は潤されたのである。

父は主が見守って下さることを確信していたので、夏の間、一度も用水路の掃除やとうもろこし畑のうね立てをしなかった。暑くて雨の少ないユタでは、農家の暮らしはすべて灌漑用水路に依存していたが、その夏、父の農場の灌漑用水路は一度も使用されなかった。灌漑をしないで夏を越したことはかつてなかったのに、その年の夏は違っていた。その夏は主の夏であった。主が養って下さっていたのである。

夏が終わる頃には、いつもの年の3倍の牧草の収穫があり、麦も、飼料用のとうもろこしも大豊作だった。まさしく天の窓は開かれ、主が養って下さったのである。

あの奇跡的な夏から大分たつが、私自身の信仰は以来ずっと強められてきた。主はしばしば私たちを祝福したいと望んでおられるのに、私たちの方で主を拒んでしまう。私たちが、すべてのものを与えて下さる主に頼ることに疑いを持って、それでもなお主は私たちに命の水を送りたいと心から願っておられる。しかし、用意されている祝福を受けるには、私たちは主を完全に、無条件に信頼しなければならぬ。何の慰めの兆しもないままに、自分の望みが色あせ、しばんでいくのをただ見ていなければならないように思われることがあるかも知れない。しかし、その時は、信仰の試しの後に奇跡が起こることを思い起こそう。

# 神のみ言葉

タミー・ラベナ・トビン

**私**は13歳の時から、自分が属する教会で奉仕の生活を送りたいと思っていました。善良なカトリックの家族の中で、8人の子供のひとりとして育てられてきた私は、家族の助けを得ながら、6年にわたる修道院での訓練を終え、ついに修道誓願を立てるまでに至りました。最初の任地はオーストラリアのパスで、そこで4年間務めた後、シドニーへ転勤になりました。修道女としての生活はとても報いのあるもので、人々に奉仕する中で数多くの素晴らしい体験をすることができました。その頃のことは決して忘れることができません。なぜなら、私はこの時期に、人生を大きく変えることになったひとつの重要なことを体験するよう備えられていたからです。

別に普段と変わりのない朝でした。修道院から少し離れた所に住むひとりの年老いた女性を訪ねる途中でした。ダークスーツを着込んだふたりの青年が私の方に向かって歩いてきました。背の高い方のひとりが私の前に来て立ち止まり、自己紹介をするので、末日聖徒イエス・キリスト教会について何か知っているかと尋ねてきました。私はイエス・キリストについて知りたいと思

った事柄はすべて知り尽くしていると答えました。すると彼はこう言いました。「キリストがある民を訪れ、彼らにみ言葉を伝えたとしたら、そのみ言葉について知りたいとは思いませんか。」

私はちょっと考えてから、「知りたいですね」と答えました。

すると彼はポケットの中からモルモン経を取り出して言いました。「この本には古代アメリカの民にイエス・キリストが現われた時のことが書かれています。神があなたに望んでおられるのは、この中の34ページ(Ⅲ二一ファイ11—28章)を読み、それが真実かどうかを祈りによって尋ねることです。いかがですか、そうしてみませんか。」

カトリックの教えが私にとって非常に大切なものであると同じように、彼にとってもその宗教がかけがえのないものであるということがよくわかりました。私はその34ページを読み、祈ってみると答えました。そして翌日の朝、会った時に、その本を返すという約束をしたのです。私はその本を受けると、彼らと別れました。

その夜二一ファイ第三書を読んで感じた気持ちは、今でも何と表現してよいかわ

## 神のみ言葉

かりません。私は祈るまではしませんでした。が、そこに書いてあることが真実であることを知りました。救い主のみ言葉は素晴らしいものでした。その一言一言が真実であることがわかりました。私はそれまでの人生で味わったどんな思いよりも素晴らしい気持ちを胸に抱いて、ベッドに入りました。まさしく、真理を見いだしたという気持ちでした。

次の日の朝、私は真実のものを見つけたとだれかに話したいと思いましたが、自分のその気持ちを抑えつけるようにして、「いや、そんなはずはないわ」とつぶやいていました。私はベッドを出ると長老たちに会う仕度をしました。しかし、約束の時間が近づくにつれて、私は気おくれしてきました。約束より10分早く着きましたが、その10分が何時間にも感じられました。そして彼らは約束の時間ちょうどにやって来ました。

私はまずモルモン経を差し出し、心の中の本当の思いとは裏腹に、それ以上読みたいとは思わないと言いました。すると相手の長老が、モルモン経を受け取ろうとせずに、読んだことについて祈ったかどうかを聞いてきました。私が「いえ、祈るまではしませんでした」と返事をすると、ひとりの宣教師が「祈らなければ、決して真実なものかどうかはわかりませんよ」と言いました。

私はその本は真実ではないと言いたい気持ちに駆られました。結局できませんでした。長老たちは私が何か心に動揺をきたしているのを感じ取っていましたが、それ

がどのようなことなのかまでは、気が付かなかったようです。

もうひとりの長老も言いました。「きのうお読みになったのでしょうか。どうしてお祈りをしなかったのですか。」

私には答える言葉がありませんでした。そしてついに、モルモン経を読んだ時に感じた思いを話してしまったのです。

するとこう言われました。「あなたはモルモン経が真実であることを御存じなのです。そうです、ジョセフ・スミスは神の予言者で、私たちにはバプテスマを施すための神の権能が授けられているのです。あなたは、この真理と神に従おうとするなら、バプテスマを受けなければならないということも御存じなのです。神の権能を授けられている者からバプテスマを受けたいと思いませんか。」

彼らの言葉通りにしなければならないということはすぐにわかりました。にもかかわらず、私は「いいえ」と答えてしまったのです。その返事が正しいものでないことは自分でもわかっていました。でもそう言えば長老たちも私を解放してくれるだろうと思ったのです。ところが、そうはいきませんでした。

彼らはこうやってきたのです。「もし神が祈りの中で日曜日に〔その日からたった3日後〕バプテスマを受けなさいと言われてたらそれに従いますか。」

「はい、そうします。」答える言葉はそれしかありませんでした。

「それではこれから、祈りができる場所に行きましょう。」

## 神のみ言葉

人気のない所に来ると、ふたりはどう祈ったらいかを私に説明しました。祈り始め、バプテスマを受けるべきかどうかを神に尋ねると、モルモン経を読んだ時に感じたと同じ気持ちがわいてきました。目を開けた後、私たちはひと言もなく見つめ合っていました。それはとても長い時間のよう感じられました。私は話すのが恐かったのです。しかし、ひとりの長老が口を切りました。「素晴らしい気持ちがしませんでしたか。」

「おっしゃる通りです」と私は答えました。

「神に従い、その戒めを守って悔い改め、権能を持つ者からバプテスマをお受けになりますか。今度の日曜日にそうしたいと思えますが。」

私はしばらくためらっていましたが、最後に言いました。「わかりました。神に従い、バプテスマを受けます」と。

日曜日が来て、長老たちは聖書の中から素晴らしい真理を幾つも教えてくれました。それはわかりやすいものでしたが、それ以前には読んだことも聞いたこともない教えでした。私はほかのシスターたちに自分がしようとしていることを話していませんでした。長老たちの所へ行くために修道院を出たその朝、私は不安と共に胸の高鳴りを感じていました。長老たちが集う教会の礼拝行事は素晴らしいものでした。その後、ある素晴らしい会員の家でバプテスマを受けるまで、しばらく時がありました。

バプテスマの時が近づくにつれて、私は心の中に何かひるむものを感じていました。

しかし、私は神が自分にバプテスマを受けるように望んでおられることを知っていました。そしてついにバプテスマを受け、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として確認されたのです。

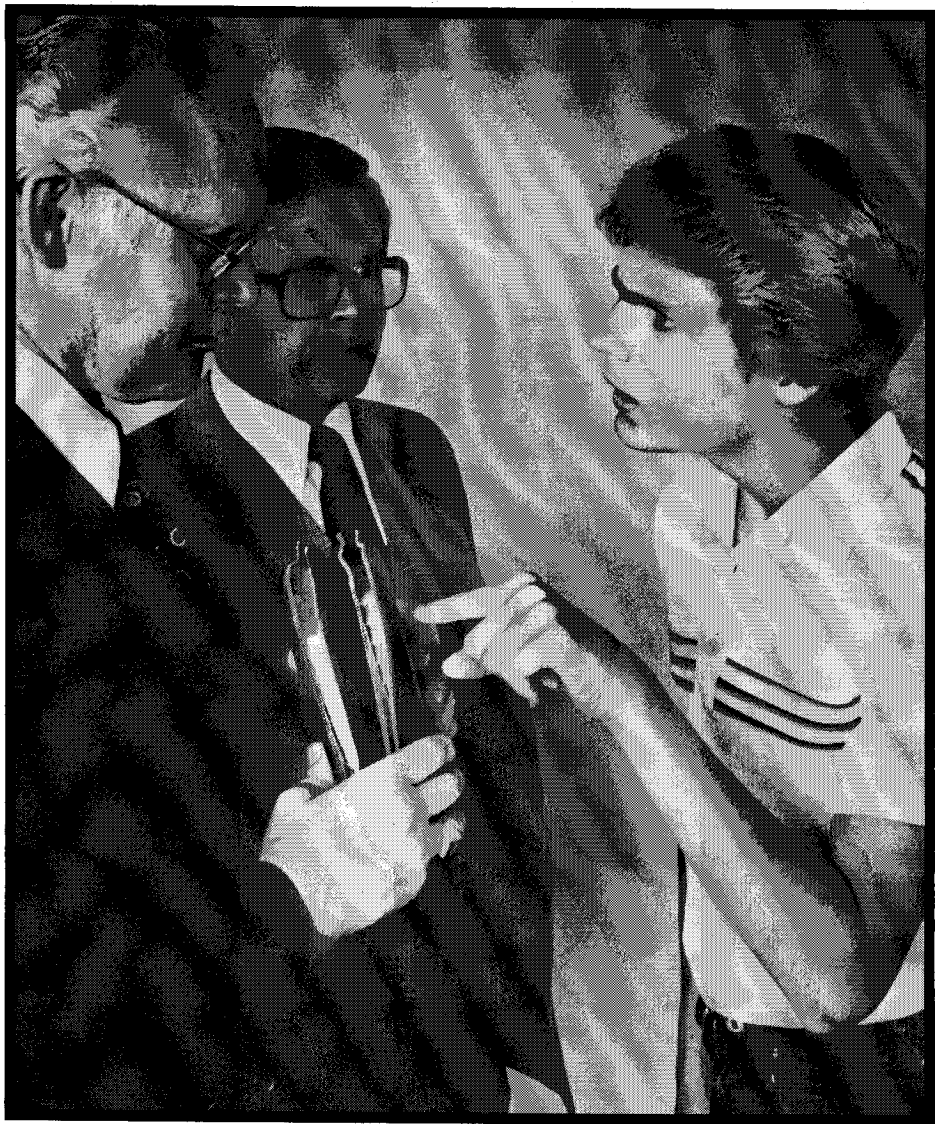
修道院に戻ったその夜、持ち物をまとめる私の胸の内には、数多くの楽しい思い出と感情が次から次と表われては消えていきました。幾人かのシスターたちが来て、私に何をしているのかを尋ねてきました。私は短く答えました。「私はここを出ます。神が私にどこへ行くように望んでおられるかがわかったのです。私はモルモンになりました。今夜バプテスマを受けたのです。」

彼女たちは驚きました。でも私は荷作りを続けました。そして別れを告げる時、彼女たち一人一人にモルモン経を渡し、「心と思いを開いて、この本を読んで下さい」と言いました。

私は自分の選択が正しかったことを知っています。そしてカトリック教会と、そこで与えられたものに感謝しています。カトリック教会での経験は、私に回復された福音を受け入れる備えをさせてくれたのです。神は生きておられます。神は完全な御方ですが、私たち人間と似たところを持っておられます。イエスはまことにキリストであり、今も生きておられます。キリストは悔い改めを条件に私たちの罪を贖って下さいました。ジョセフ・スミスは神の予言者であり、今もこの地上に予言者が与えられています。私は自分自身の体験から、モルモン経がまことに神のみ言葉であることを知っています。

# 批判に処する

ダン・ワークマン





## 批判は愛にとって最大の障害物かも知れませんが、しかし、愛は他を批判する心を克服するための最強の武器でもあります。

ふ たちのホームティーチャーは、あいさつを交わし、腰を下ろす間もなく、出し抜けにその家の高校生の男の子から質問を浴びせられました。「どうしてほくたちの教会だけが真実の教会だなんて言えるの。学校で成績が上位の生徒たちはモルモンじゃないけど、ほくたちと同じように、自分の教会が正しいって信じてるんだよ。」

父親の方をちらっと見ると肩をすくめ、うんざりといった表情で、「今度はあなたが説明する番、お手並みのほどを拝見させていただきますましょう」とでも言いたげな様子でした。

年輩の方のホームティーチャーがちょっと間を置いてから口を開きました。「クリス、いい質問だね。私がまだ君より2、3歳年上だった頃のことを思い出すよ。大学に入るために初めて親元を離れる時だった。私はひとつの偏見を持っていた。自分は素朴で健康的でないなかの生活を後にして、福音の原則に対する攻撃が絶え間ない、退廃的な町へ行くんだなんて考えていたような気がする。でも、実際はそんなんじゃないかった。クラスメイトはみんないい人ばかりだね、こっちが驚かされてしまったよ。どこかの教会に通ってた人もいたし、どの教会にも行ってない人もいた。それで、私は彼らの行動を気を付けて見ていたんだが、自分もし末日聖徒の家庭の中で育てられていなかったら、彼らほどに正直な人間にな

っていたらどうかって考える時がよくあったよ。クリスはそんなふうに考えたことないかな。」

クリスがそれにうなずくと、ホームティーチャーはさらに言葉を続けました。

「そう、確かに私たちは、この教会は唯一真の教会だって言うけど、自分たちがほかの人たちより優れているとか、良い行ないをしようと考えているのは地上で自分たちだけだという意味じゃないんだ。神権の権能を通して福音を広め、救いの儀式を行なう権能を与えられた唯一の教会という意味なんだね。そして、この素晴らしいものを、すべての人と分かち合いたいと考えてる……」

話し合いは穏やかに進んでいきました。「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」(エペソ4:5)という聖句と他の聖句を幾つか読むと、クリスは自分の疑問に対して納得のいく答えを得たようでした。

クリスのやっかいな質問に対するこのホームティーチャーの応待は、批判というものに対して建設的で効果的な対処をする上で役に立つ原則を数多く教えてくれていました。

### 1. 驚いてはいけない。備えをしておきなさい。

いつの時代のホームティーチャーも、教会や福音の原則、会員、指導者などに対する批

判と受けとれる質問や言動などに直面してきました。それらにいかに対処するかによって、ホームティーチャーは担当家族にいつまでも消えることのない影響を及ぼせるかどうかが決まります。ホームティーチャーが賢明な方法で応え、「ただ説教と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛」(教義と聖約121:41)とによって自らの感化力を発揮する備えをしておくなら、驚いたり、困惑したり、議論を戦わせるような必要はまったくありません。

口論はホームティーチングにまったく無縁のもので、ここに挙げたホームティーチャーの場合も、穏やかな態度で接することによって、後でクリスが最終的な判断をする時に、素直に自分と折り合うことができるように配慮していました。

### 2. 肯定的な面を強調する。

相手が何か難しい問題を言ってきた場合、賢明なホームティーチャーなら、まず、この人は心からその問題について知りたがっているのだという受け止め方をするのではないのでしょうか。それからその問題を肯定的な要素と否定的な要素に分け、肯定的な部分に焦点を当てます。

クリスのホームティーチャーの場合は彼の言葉を次のように分析しています。(1) この教会だけが真実であるということへの疑問。(2) この教会以外にも素晴らしい人はたくさんいるという考え。このホームティーチャーは、まず友人たちに対する彼の肯定的な思いに焦点を当てました。ふたりはこの点において、まったく同じ考えでし

た。そして双方の心が開かれた段階になって、彼はクリスが提起した教義にかかわる問題に入っていました。こうして、彼は議論を戦わせるようなことをせずに済んだのです。議論で相手を打ち負かそうという意識がなければ、意見の一致を見るのは難しいことではありません。

### 3. 誤りを正すのに性急であってはならない。

感情的になっている人の考え方を変えさせるのは簡単ではありません。他への批判は感情的な問題に根差している場合が多いようです。人を批判をしている本人に、自分自身の誤りを理解し、それを正すための時間と機会を与えて下さい。

長い道のりを行く昔の牛追いの旅では、牛が暴走することがよくあったそうです。一旦暴走が始まるとその道筋にあるものは何の形も残さないまでに踏みじられてしまいますが、同時に、それは牛たちにも危険なものでした。カウボーイたちは日頃の経験から、暴走する牛の群れを真正面から止めようとするのは賢い方法ではないことを知っていました。彼らはまず群れの横に並んで馬を走らせ、その先に追いつきます。それから、一番先を走る牛を御して、スピードを落とさせ、先頭のグループの進路を危険のない方向へ変えさせ、群れを望みの方向へ導いていくのです。

ホームティーチャーが時々直面する批判にも、牛の暴走と共通した点がたくさんあります。他への批判は大体、不安、苦しみ、心の痛手、誤解などに端を発しているもの



です。それは批判の対象だけでなく、批判をしている当人にも危険なものです。また、牛の暴走の場合と同様、真正面からそれを止めようとするのは、一般的には賢明なやり方とは言えません。最初になすべき最も有効な方法として、多くの場合に当てはめることができるのは、クリスのホームティーチャーがしたように、不安定な感情が穏やかな方に向かうまで、並んで走ることで

す。ホームティーチャーはただ黙って相手の言葉を聞くということを求められる場合があります。それによって、何か他の問題を押し隠そうとするためだけの批判を、それと見抜けることもよくあります。例えば、「あまり教会へ行きたくない」という言葉の裏には「話を聞いてもらえない」とか「タバコがどうしてもやめられない」という口には出てこない思いがあるかも知れません。「扶助協会の集会は井戸端会議みたいでいや」という人の胸の内には「娘夫婦の別居のことを何て言われるか考えると、とても行く気になれない」という思いがあるのかも知れません。ホームティーチャーは忍耐と励ましを与えながら耳を傾けることによって、福音がもたらす喜びを感じられないでいる人が、その原因となっている心の痛みや弱さを克服できるように助けることができるのです。

#### 4. 否定的な言葉に同調してはならない。

暴走する群れの前に回り込むために、それに並んで走らせることと、暴走する群れの中に混じって走ることはまったく別で

す。同じように、批判的な言葉に耳を傾けていくということは、それに同調することとは違います。実際、それは正反對の事柄です。相手の人と良い関係を築きたいと望んでいたとしても、その人の否定的な言動に同調しているというような印象を与えないように注意する必要があります。

救い主はこう言われました。「あなたを訴える者と一緒に道を行く時には、その途中で早く仲直りをしなさい。」(マタイ5:25)これは他の人の批判的な言動に、自分も声を合わせなければならないという意味ではありません。批判的な態度、言動を正そうとする前に、互いに合意できる肯定的な部分を見つけ、信頼し合える関係を築いておかなければなりません。合意できるところでは合意し、合意できない点に関しては、穏やかに話し合える雰囲気ができるまで待つ、これがクリスのホームティーチャーのやり方でした。

#### 5. 証を述べる。

相手の思いを高め、励ましとなるように、福音が真実であることと教会を導く啓示の力について証して下さい。自分が助けようとしているその相手の人に、非難されているという気持ちを持たせたり、敵対心を感じさせたりしないように気を付けて下さい。

クリスにはほかにも、なかなか理解できないことがありました。友達と話している時に出てくる問題なのです。両親もそのことでは大分気をもんでいました。両親はふたりとも教会に活発ではありませんでしたが、息子には教会に活発であって欲しいと

## 批判に対処する

思っていました。でも、息子の質問にどう答えたらよいのか、さっぱりわからなかったのです。その夜、ふたりのホームティーチャーはクリスの家を辞した後で、これから週に1度彼らの家を訪問して、少しの時間、彼らが知りたいと思っている事柄の中からテーマを選んで、福音の原則を教えるようにしたらどうだろうかと話しました。レッスンの後では、彼らが疑問に思っていることに答える時間を取るようになりました。

これは非常に効果的でした。ある時、クリスはどうしても納得できないでいた事柄を質問してきました。「世界には飢えて苦しんでいる人が数え切れないほどいるのに、教会はどうして建物の建設にお金を一杯つぎ込んでるんだろう。」

ホームティーチャーたちは、前の時と同じように、この質問に対処しました。クリスの言葉を分析してみると、(1) 助けを必要としている人々への思いやりと、(2) 教会が建物に費やしている膨大な額のお金への彼なりの考えに分けることができます。

このふたつの要素に分けた後、彼らはまず、肯定的な部分に焦点を当てました。困っている人たちへの思いやりという点で、彼らは完全に同じ思いでした。ホームティーチャーのひとりが言いました。

「クリス、君は今、貧しい人たちのことを言ってるけど、教会もそのことについては重大な関心を寄せているんだ。私は、主が地上の民とその生き方を心から喜ばれた時代というのはあまりなかったように思うけど、ひとつ素晴らしい例があるんだ、エ

ノクのシオンの町さ。」彼は聖典のある箇所を開いて、クリスに渡し、「その18節を読んでみて」と言いました。

「主、その民をシオンと呼びたまえり。彼ら心を一にし、精神を一にし、義に住みたればなり。されば彼らの中に貧しき者一人もなかりき。」(モーセ7:18)

そのホームティーチャーは「シオンの中には貧しい者がひとりもあってはならない。教会はこの問題に取り組んでるんだ」と言ってから、教育を受けて力を蓄える、よい職業に就く、必需品を貯蔵する、心身の健康に気を付けるといった事柄を教え、その実践を促す個人と家族の備えのプログラムについて説明しました。そしてこう付け加えました。

「君はさっき教会の建物のことを言ったけど、教会の建物というのは礼拝を行ない、こういった事柄を教えるためにあるんだ。」

すると同僚がその後を受けて言いました。「その通り、私は前に北西部の方に住んでいた。とても小さな町で、私たちが改宗した時は、会員もそんなにいなかった。私たちはとにかく福音について勉強したかった。共に集まり、学び合える場所を持つということは本当に大切なことだと思う。私たちはその町に礼拝堂を建てたんだ。並大抵のことではなかったけど、それが本当に必要な物で、実際の役に立つということに疑いは持たなかった。かなりのお金が必要でね、限られた予算の中で、できる限り立派な物にしようと頑張ったんだ。」

「で、そのお金はどこから出たの」とクリスが聞きました。



同僚のホームティーチャーがそれに答えました。「一人一人の会員からさ。私たちがお金を大切に扱うのは、そういうことがあるからなんだ。集会場にしても神殿にしても立派な建物ばかりだけれど、決してむだなお金は使っていないよ。たとえ昔の私たちのように貧しい人であっても、教会に改宗した人の生活に生じる変化は、とても言葉では言い尽くせないと思う。教会は生活水準も含めて、あらゆる面で私たちを向上させてくれている。福音は最終的に、霊と肉の両面ですべての貧しさ、苦しみを解決してくれると私が信じているのは、そのためなんだ。」

ふたりのホームティーチャーはこの時も、問題をこじれさせることなく、クリスの考えを正しい方向へ導くことができました。クリスの言葉の中にわずかに見えた否定的な部分はしばらくわきに置き、まず肯定的な考え方を補強しておいて、次に扱い方ひとつで難しい方向へ進んでしまうケースを、素晴らしい学習の機会に変えたのです。

この対処法は教会の指導者や他の会員に向けられる批判にも十分に応用できます。批判の内容を問わず、前向きの意志の疎通ができる部分から取りかかる必要があります。そのような批判は、指導者、会員はすべて完全な者であって欲しいという願望の遠回しな表現に過ぎないのではないのでしょうか。最初は、特定の個人ではなく、福音は私たちを完全な者にするという点から話し合いを進めていくべきです。特に、ホームティーチャーはその批判に同調しているというような印象を与えないようにしなけ

ればなりません。

この場合は、教会の指導者は靈感によって召され、支持するとは、どのような短所を持っているかにかかわりなく、その人が責任を全うできるように助けるという意味であることを、最終的な結論として出せるように話し合いを進めていくべきです。つまり、神が召された人を支えるということです。自分が指導者として召されている人なら、誤りのない決定を下すことの難しさ、人々の支持がどれほど大きな力になるかを話すのも良いかも知れません。

さらに言えば、その批判を口にして本人が、他の人の欠点と自分自身の救いには何の関係もないということを思い起こせるよう、思いやりのある方法で導くとよいでしょう。

批判に対処する方法のいかに問わず、他のすべてに勝るひとつの原則があります。そうです、それは愛です。批判は愛にとって最大の障害物かも知れません。しかし、愛は他を批判する心を克服するための最強の武器でもあるのです。福音は私たちに、愛を自分の中に持つだけでなく、他の人の心の中にそれを植え付けるように教えています。それをするには、愛を示す必要があります。私たちはホームティーチングの中で、担当家族が達成した事柄を称え、訪問して語り合い、助け、教え、支え、手を差し伸べることによって愛を示します。それがホームティーチングです。それが福音への愛を築き、互いへの愛を高める過程なのです。

セ ミナリーのクラスが終わり、生徒たちはいつものように若者らしいにぎやかな会話を交わしながら、それぞれに自分の本を取りまとめていました。そして三五々クラスを出て行く彼らの心は、もう次に何をするかに飛んでいました。

やっとひとりになった私は、幾分疲れを覚えながら、教室の一番前にある自分の椅子にどっかりと腰を落としました。いささか自信を失くし、動揺していたのかも知れません。その日は特に苦しい日でした。毎度繰り返されるデニスとのやりとりの中で、私は激しく攻めたてられたのです。

デニスは、私が福音について話す一言一言に必ずと言ってよいほど突っ掛かってきました。その上、以前の話し合いの中で答えを出しておいたはずの質問をまた持ち出してくるのです。デニスの巧みな言葉にのせられて、私自身の考えを明らかにせざるを得なかったことも一度ならずありました。私は自分の教えている永遠の原則が真実であることをもう一度証し、それに個人的な証を付け加えました。

私は机の前に座り、自分の態度が幾つかの点において、教条主義的で角々し過ぎたのではないだろうかと考え始めていました。もちろん私が教えたのは教会の公式の見解で、聖典や教会幹部の言葉、また私自身の体験からも裏付けることのできるものでした。しかし若い人たちには私の言葉はきつ過ぎて、受け入れてもらえなかったのではなからうか、デニスや時々彼の肩を持つアリスのような生徒たちの心が私から離れてしまったのではないだろうかなどと考え込んでしまいました。

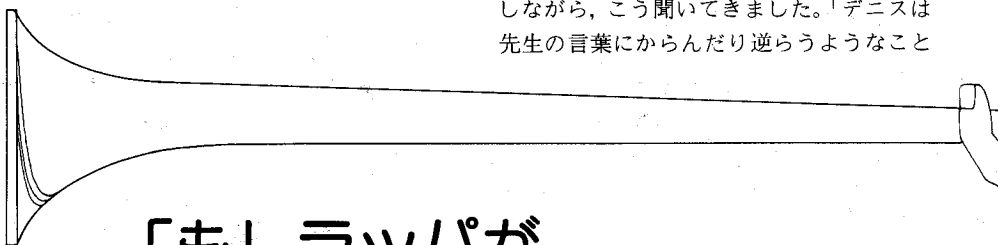
私は自分の机を整理し始めながら、この問題について祈るような気持ちで考えていました。その時、私のクラスの生徒のひとりであるジョンが置き忘れた本を取りに教室に入ってきました。

「先生、調子はどうですか。」

「まあまあかな、君はどう。」

「絶好調ですよ。先生、さっきの授業、デニスのお陰でちょっと協道にそれちゃいましたけど良かったですね。」

それからジョンは少し言葉を選ぶようにしながら、こう聞いてきました。「デニスは先生の言葉にからんだり逆らうようなこと



「もしラツパが  
はつきりした音を  
出さないなら」

ウェイン・B・リン

を言ったりしますけど、そのこと気にしてらっしゃるんじゃないですか。」

私はジョンの言葉に静かにうなずきましたが、ただそれだけでなく、デニスの心をつかみ、主の教えに対して、もっと前向きの信仰を持つように指導できない自分自身のふがいなさが何ともやりきれないということ話を話しました。

するとジョンは笑みを浮かべながら、「そうじゃないかと思ってたんです。先生、ジョンのことでちょっとお話しておいた方がいいと思うんですけど……」と言ってきました。

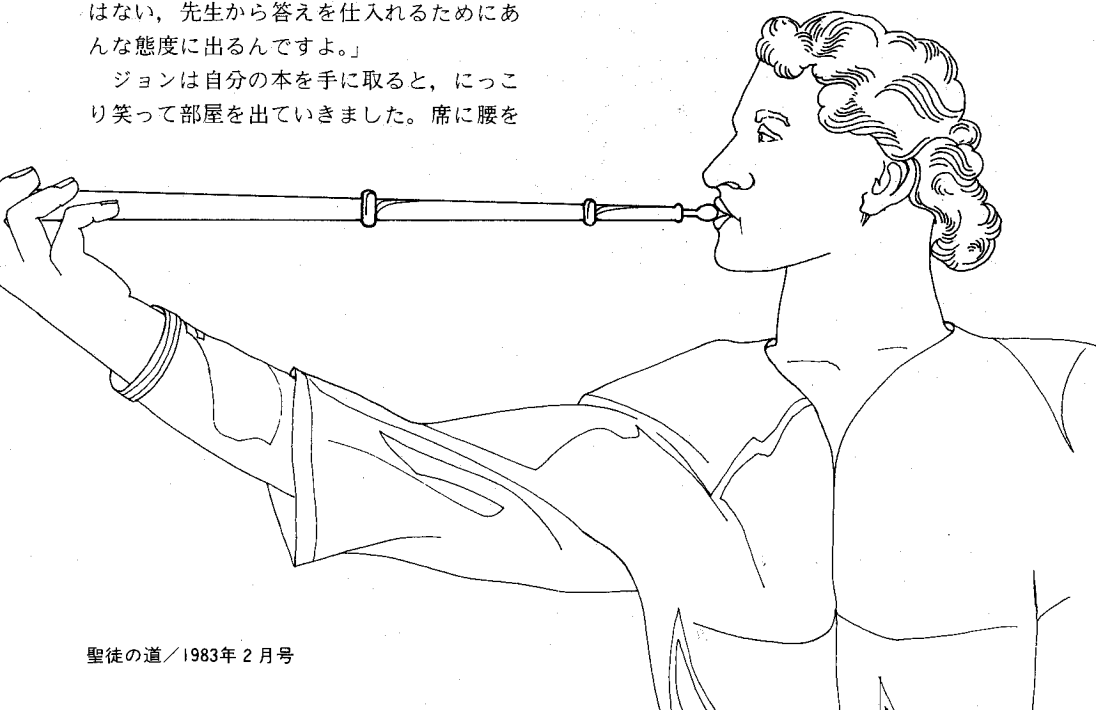
「デニスには教会員でない友達が学校にたくさんいるんです。彼はセミナーのクラスでは反抗的に見えますけど、一旦学校に行くと、先生と同じ立場に立たされるんです。彼が先生に仕掛ける議論は、彼自身が友達から吹っ掛けられた議論なんです。ですからデニスは、先生から聞いた答えを友達のところで話すんです。何のことはない、先生から答えを仕入れるためにあんな態度に出るんですよ。」

ジョンは自分の本を手にとると、にっこり笑って部屋を出ていきました。席に腰を

おろし直した私の顔もほころんでいました。ジョンの言葉でそれまでのことがすべて飲み込めたのです。そして、今度デニスから質問を受けた時もきつと理解ある態度で接しよう。喜んで彼の助けになろうと心に思いました。

もう恐れはありませんでした。もし私がデニスの態度にたじろいだり、妥協的なことを言ったりしたら、一体どうなっていたでしょうか。デニスの信頼を失っていたばかりか、彼を裏切り、彼の教師としての神聖な使命に背くようなことになっていたのです。

パウロは言いました。「もしラッパがはっきりした音を出さないなら、だれが戦闘の準備をするだろうか。」(Iコリント14:8) 私たちは人の耳元でラッパをやかましく鳴らすようなことはしません。しかし、その教えを軽々しく吹聴するわけでもありません。それは、快く、誤りのない、確かな音色でなければならないのです。





---

---

# リグランド・リチャーズ

## 奇しきみわざ

ルシール・C・テイト

---

---



リグランド・リチャーズ長老が説教壇に立つと、聴衆の間に興奮の波が静かに広がっていきます。多くの人には以前に彼の話聞いたことがあるのですが、ほとんどの人は身をのりだすようにして話を聞こうとしています。リチャーズ長老独特のユーモアのセンスと清らかさ、あるいは彼自身の逸話や体験談から人を救う福音の力について語る才能、聴衆をひきつけるもの

がそこにあるのです。

現在の教会幹部の中で、リチャーズ長老ほど長寿を保っている人はいません。ひとりもないのです。

事実、1982年6月19日、リグランド・リチャーズ長老は教会指導者の間に記録をうちたてました。その日、彼はデビッド・O・マッケイ大管長の96歳と132日という記録を更新し、末日の神権時代における最高齢の教会幹部となったのです。

この長寿記録をうちたてる数日前に、リチャーズ長老はソルトレーク・シティーの病院で手術を受け、右足をふくらはぎの中ほどから切断しました。右足の下部に血が通わなくなっていたためです。しかし、この大手術もリチャーズ長老をベッドに縛りつけておくことはできませんでした。彼は手術後間もなく、義足をつけ、松葉杖をつけて指導者としての責任を果たし始めたのです。

年月と共にリチャーズ長老の肉体は衰えを見せていますが、活気は少しも失われていないようです。それは彼の話を開けば分かります。リチャーズ長老は響きわたるような声と速いテンポで人々に息もつかせぬ



勢いで話すので、聴き手の方が少しは息をつけばよいのと思う程です。

リチャーズ長老の説教はどれも新鮮で活気にあふれ、メッセージはいつも生き生きしています。よく見かけることですが、説教をまとめる段階になるとしばし話を中断し、管理者か司会者の方を振り向いてこう尋ねます。「もうひとつ別の話をする時間がありますか。」リチャーズ長老は1日中でも話し続けるかもしれません。彼の話からあふれ出る喜び、それこそ私たちが求めているものなのです。

リチャーズ長老は由緒ある家庭で育ちました。これまでに5人の使徒がリチャーズ家から出ています。副管長がふたり（ウィラード、ステイブン・L）、十二使徒評議員会会長がふたり（フランクリン・D、ジョージ・F）、現在のリグランド、十二使徒補助がひとり（ステイナー）、それに七十人定員会会員がひとり（七十人第一定員会会長会の一員、フランクリン・D）です。

現在96歳のリチャーズ長老は、この神権時代における教会歴史の実に半分以上を生きたこととなります。その半生はジョン・テイラーからスペンサー・W・キンボールまで、10人の大管長の在任期間に及んでいます。

## リチャーズ長老の少年時代

リグランド・リチャーズ長老は、1886年2月6日、ユタ州ファーミントンで生まれました。父親はジョージ・F・リチャーズ、母親はアルミラ・ロビンソン・リチャーズで、リグランドは15人兄弟の3番目で

した。

骨を折って働く、それがリチャーズ家の習慣でした。小さな子供といえども、何らかの責任が与えられました。各々が年齢と理解力に相応した仕事をするように教えられていました。そして、期待を裏切らずに仕事を果たすように励まされました。

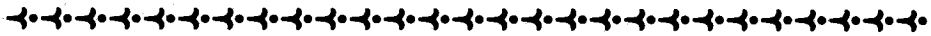
11歳になると、リグランドは一人前の仕事ができる年齢になったと見なされました。父親を心から愛するリグランドは喜んで一緒に働きました。そして父親から日々受ける教えや、しばしば交わされる福音に関する話し合いにより、多くのことを学びました。

リグランドは父親を助けて16ヘクタールのトウモロコシ畑を除草し、すきで耕し、幅が3.5メートルもある穂刈機を操作しました。また、干し草や材木、アドービレンが、石灰、まきなどを運びました。

行なう仕事は何であれ、冬になると大変でした。まきを集めるために父親と深い峡谷に入ったこと、凍りついた手袋のこと、ヒマラヤ杉の切り株を掘り起こしたこと、あるいは馬に逃げられそうになったこと、リグランドはよくそのような話をします。

リグランドは父親の模範を目にし、何でも進んで行なう精神を具えていましたから、奉仕を当たり前のことと考えるようになりました。執事定員会の会長を務めていた時のことです。リグランドはステーキ部長会で働いていた父親のように、忠実にその責任を果たしました。当時のことを振り返ってこう語っています。「毎週土曜日には集会所を掃除しなければなりません。大きな2台のストーブにくべるまきを割り、まき入





ありません。しかし私たちは、伝えられてきた記録から、神の偉大な人々の生涯や業績、教えなどについて学び、彼らと毎日交わることができるのです。

## 健康面での試練

リブランドの半生は、少年時代も含め、健康面ではあまり恵まれていませんでした。何度も病気にかかり事故にも遭いましたが、その度にリブランドの気質はみがかれ、霊的に強くなっていきました。

まだ幼い少年の頃、斧の背が頭にぶつかりました。リブランドは意識を失って倒れ、頭からは血が流れました。しかし、神権の祝福と治療のお陰で快復しました。

それから間もなくして、馬車に乗っていたリブランドは、馬が突然後ずさりしたために、投げ出されて地面にたたきつけられました。その時、頭の上を車輪が通りました。そして助け出される前に、とって返す車輪で再び頭をひかれたのです。驚いた父親は泣き叫ぶ息子を抱き起こし、祝福を与えました。この時も完全に快復しました。

8歳の時、股関節をある種の病気に冒されました。リブランドは9カ月の間、腰の周りと足全体にギプスをはめ、松葉杖をつけて生活しました。そのため、学年が1年遅れました。まだギプスをはめていたある日のこと、リブランドは狂暴な雄羊に襲われました。繰り返し襲いかかってくる雄羊に対し、柵に寄りかかり、両手でその攻撃をかわそうとしました。何とか命が助かったのは、腰の周りのギプスのお陰でした。

9歳になってまだ松葉杖を使っていたリ

ブランドは、さらに不幸な目に遭いました。再び馬車にひかれたのです。「私の腕は馬車にひかれて折れていました。私は手探りで松葉杖を捜し出して、どうにか馬車の下から、はい出しました。腕はひどい角度に折れ曲がっていました。でも、ベイソン・パスチャーから父が帰って祝福してくれるまでは、医者に治療させようとはしませんでした。」

少年時代に重い猩紅熱にかかり、熱が高くなって危険な状態が何日も続いたこともありました。

ようやく19歳になって伝道に出発する準備が整った時、再び松葉杖が必要になりました。今回はひざの関節がはれてひどく痛みました。医者は、家で療養するように勧めました。しかし、リブランドは父親に頼んで神権の祝福を施してもらい、予定された日に、松葉杖も包帯も使わずに、伝道に出かけて行ったのです。

たったひとつの例外を除けば、どのような事故も病気も、リブランドに後遺症を残していません。その例外とは股関節の病気のことです。後遺症として、片方の足が4センチほど短いために生涯びっこをひくことになりました。また、ほとんどいつも不快感と痛みに悩まされることになりました。

成人してからも健康面での試練は続きます。最初と2度目の伝道期間中に、視力がしだいに衰えていき、まったく字が読めなくなりました。リチャーズ長老は次のように記しています。「船酔いをしているような気分だ。はげしい頭痛と吐き気がする。」

1912年、結婚後わずか3年目に、リブランドは恐ろしい伝染病である天然痘にかか

りました。その後、1918年から翌年にかけて悪性のインフルエンザが大流行した時にも、病に倒れました。

これらの試練に加えて、リチャーズ長老は1942年と1964年に心臓発作を起こしました。最初の発作があった時、医者是这样いきました。「きょう1日もつかどうか、10セントも賭けられませんかよ。」しかし、リチャーズ長老は命を取りとめ、しだいに快方へと向かっていったのです。

リチャーズ長老は回復すると通常の仕事にもどりました。しかし、ステッキをついて歩く姿をよく見かけるようになったのはこの頃からです。以前に患った股関節の病気のために、足の運びは思うようにいきません。しかし足取りが遅くなることはありませんでした。

1978年、ヘルニアの手術後、リチャーズ長老はボイド・K・パッカー長老と一緒に歩いて神殿での集会に向かいました。パッカー長老は自分の腕に体重がかかってくるのを感じて、心配そうに尋ねました。「いつも痛むのですか。」

すると元気のいい声が返ってきました。「がまんできないほどじゃないさ。」

1979年2月23日、リチャーズ長老は病院に収容され、1カ月近くも危険な状態が続きました。死亡記事が準備され、リチャーズ長老の逝去は時間の問題であると、大管長会と十二使徒会に知らされました。しかし、病状はしだいに快方へと向かっていきました。

その後、十二使徒会の会合でリチャーズ長老はこう言いました。「議事録を読むと、私が間もなく死ぬという知らせを受け取った



結婚50周年を祝うリチャーズ長老夫妻

ことが書いてあります。皆さんは私にかつがれたわけですね。」

## リブランド・リチャーズの特質

リブランドが少年時代に受けたしつけは、子供の頃に経験した多くの試練と相まって、真のクリスチャンとしての特質を築き上げていきました。リブランドは若い時から、正直かつ勤勉であり、福音のために献身し、信仰と祝福に対する神への感謝に満たされていました。幾つか例を挙げてみましょう。

**勤勉と献身** 1905年、最初の伝道をオランダで開始した時、伝道本部で働く責任が与えられました。リチャーズ長老はオランダ語を十分に話せなかったため、早くオランダ語を身につけなければ伝道の妨げになると感じました。そこで、伝道本部の仕事を手早く片付けて、残った時間をオランダ



語の勉強にあてました。それに加えて、伝道のみたまがリチャーズ長老の上に力強く注がれました。彼はこう記しています。「私はどうしても福音を宣べ伝えたいと思ったので、5時前に起きてオランダ語を勉強し、午後には伝道に出られるように本部の仕事を片付けた。」リチャーズ長老は、1日に50枚、92枚、110枚のチラシを配ったと記録



1905—1908年の伝道を終えて帰還した当時のリグランド・リチャーズと家族。父親ジョージ・F・リチャーズ長老（前列左）の後ろに立っている。

しています。そしてそれらのチラシを回収するために再度訪問することにより、最初のうちは確かに不完全でもたつてはいましたが、福音に関する会話をたくさん交わすことができました。伝道時間が制限される本部の宣教師として、リチャーズ長老がどれだけ努力したかは、当時の宣教師ひとりの配るチラシが月平均197枚であったという事実からも明らかです。

1926年、ヒーバー・J・グラント大管長から短期間の宣教師としての召しを受けました。リチャーズ長老は仕事と家族を残して、国内の他の場所で6カ月間伝道しました。1929年、グラント大管長から再び召しを受けました。今度は家を売り、仕事をやめてカリフォルニアへ引っ越し、そこで最初はグランデールワード部の監督として、その次にハリウッドステーキ部のステーキ部長として働いて欲しいというものでした。そのような召しは、教会歴史のこの時点では、きわめて異例のことでした。しかしリチャーズ長老は、使いの者からその召しを受け取った時、こう言いました。「大管長に伝えて下さい。私は主と教会と大管長のなさることをいつも念頭に置いています。もし大管長がそのように望まれるのであれば、

1952年に十二使徒定員会会員に召された当時のリグランド・リチャーズ長老（前列左）と家族。

私は参ります。」

**信仰** リチャーズ長老が最初の伝道を終えて船で帰国する途中、海が荒れてきました。そしてアメリカの海岸に近い所で、激しい嵐になりました。山のような波が逆巻き、甲板に固定されていない物はすべてさらわれました。スカンジナビアから帰る途中のある姉妹が、リチャーズ長老、あなたは恐くないのですか、と尋ねました。

「そうですね、あなたや他の乗客の方がどうなるのか私には分かりません。でも私の心は母の部屋でくつろいでいる時のように、安らかです。私は、伝道を立派に果たせば、無事家に帰れるという約束をいただきました。私の伝道は主のみこころにかなうものであったと思います。ですから、私は家に帰るのです。」

**感謝** 感謝の心は、リチャーズ長老の生活の基調となるものです。彼はアムステルダムで伝道していた時のことを振り返ってこう語っています。「小さな礼拝堂によく出かけていき、説教壇の後ろにひざまずいて、この地で伝道する特権や……福音について証する機会が与えられていることを、心から主に感謝しました。そうする時に、心の中にわきたつような喜びを感じました。」この喜びは伝道期間中いつも、リチャーズ長老と共にあったのです。

## 教会での幅広い奉仕

主はリチャーズ長老を数多くの奉仕の業に召されました。専任宣教師として2度、伝道部長として2度、それらの年数を合わせると10年近くになります。また教会幹部

としての在任期間は40年になり、これは今も続いています。さらにポートランドとオレゴンで支部長を、ソルトレーク・シティで（2度）監督を、カリフォルニアで監督とステーキ部長を、それぞれ忠実に果たしてきました。

1938年4月6日、リチャーズ長老は教会の第7代管理監督として支持されました。それから14年の間に管理監督会は多くの貢献をしました。その幾つかを挙げてみましょう。

- ワード部の管理維持と必需品に関する全教会予算制度（当時、副ステーキ部長であったマーク・E・ビーターセン長老は、この変更について次のように語っています。「ワード部とステーキ部の財政管理に対する考え方を根底から変えて、社会全体に大きな利益をもたらしました。」）
- 全教会の什分の一と献金をすべて管理監督会事務局にいったん集め、それから各ユニットの出費をそれぞれの規模と必要に応じて払い戻す制度。
- 中央教会員記録（それ以前は、ワード部レベルでのみ会員記録が保管されていた）
- 個人賞および団体賞プログラム
- 教会全体の聖餐会出席者の著しい増加
- ワード部およびステーキ部の集会所の敷地の整備と美化

リグランド・リチャーズは、教会員がはるかに少ない時代の管理監督として、ひとつの方針を掲げていました。管理監督会のジョセフ・L・ワースリン副監督は、それを「門戸開放策」と呼んで次のように説明しています。「それはリチャーズ監督が就任した時から正式に発足しました。管理監督





または副監督と話したい人はだれでも、中に入って話せるようになったのです。私たちの事務室のドアはいつも開いていました。未亡人、疲れ切ったビジネスマン、問題を抱えた青少年、移住者などが、いつでもリチャーズ監督から温かい言葉と援助とを受けることができたのです。」

## 使徒としてのリチャーズ長老

1952年4月6日、日曜日の正午を少し回りました。第122回年次総大会の午前の部会が終了したところです。リチャーズ監督は何の予告もなしに、ヘンリー・D・モイル副管長から声をかけられ、デビッド・O・マッケイ大管長が事務室でお待ちですと告げられました。リチャーズ監督が部屋に入ると、大管長は、2月3日に亡くなったジョセフ・F・メリル長老に代わって十二使徒定員会の空席をうめる人としてあなたが選ばれましたと言いました。リチャーズ長老はその時の様子を次のように語っています。「私も大管長も共に涙を流し、抱き合いました。それから私たちは、午後の部会に向かいました。」

それ以来30年にわたり、十二使徒評議員会の一員として、様々な面で奉仕の業を行ってきました。十二使徒としてリチャーズ長老は、これまで決して忘れたことのない伝道活動に加えて、特別な管理の割り当てや様々な管理会、委員会活動などの諸分野にも力を注いでいます。

多くの教会幹部と同じように、リチャーズ長老は広い地域にわたって旅行し、声高く証を宣言しました。文字通り教会全体を

くまなく旅行して、伝道部を訪問し、大会に出席したのです。さらに、多くの教会幹部と共に地域大会に出席し、ソルトレーク・シティで開かれる総大会に集う望みすら持てない人々の所を訪れました。

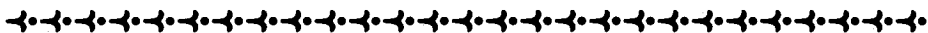
## 「奇しきみわざ」

リチャーズ長老は教会に数多くの貢献をしてきましたが、だれの心にもまず思い浮かぶものは、最初の著書「奇しきみわざ」です。(他に2冊の著書があります)「奇しきみわざ」は32年間(1950—1982)に23版を重ね、モルモン経を除けば、最も広く普及した教会出版物になります。担当者の報告によれば、合衆国で150万部から200万部印刷され、さらにヨーロッパで5万部印刷されたとのこと。この本はすでに18カ国語に翻訳されています。リチャーズ長老は本の印税を一銭も自分のものとせず、すべて教会の伝道活動のために寄付しています。

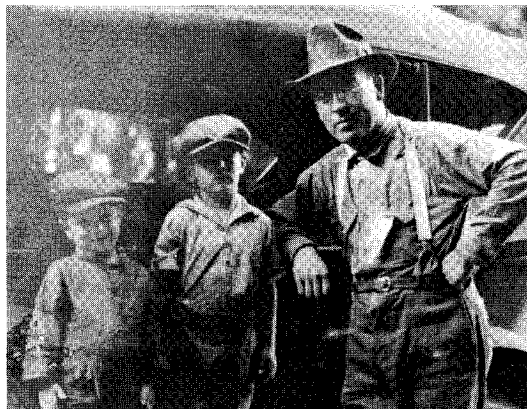
「奇しきみわざ」を通して霊的な影響を受けた人や、改宗へと導かれた人が大勢います。そのような人の体験談が全世界から、あらゆる年代の人々から、そしてあらゆる生活環境にある人々から寄せられています。リチャーズ長老の事務所にはほとんど毎日のように、「奇しきみわざ」に関する体験談や著者への感謝を記した手紙が届きます。あるいは直接本人が訪れて話をしていきます。

リチャーズ長老は、現代に主の王国を建設する上で行なった最大の貢献は、「奇しきみわざ」にあると考えています。「世の





リグランド・リチャーズ長老は、2月7日の97回目の誕生日を目前にして、去る1月11日逝去された。遺族は二男四女、孫が28人、曾孫が115人、曾々孫が9人。葬儀は1月14日に行なわれた。詳細は次号にて。



左上：1926年に合衆国東部へ短期間の伝道に出かけたリチャーズ長老と家族。1925年12月30日撮影。右上：ユタ州トーエルにあるジョージ・リチャーズの家。世紀の変わり目にリチャーズ長老は10代の時期をここで過ごした。左下：1938年に新しく召されたリグランド・リチャーズ管理監督（中央）と、副監督のマービン・J・アシュトン（左）、同じくジョセフ・L・ワースリン（右）。右下：ソルトレーク・シティーのシュガーハウスワード部のリグランド・リチャーズ監督。父親と息子の活動に、息子のラモントとリグランド・ジュニアを連れて出席した時の写真と思われる。

# 戦士 ポインティング・ アイアの 聖餐式

リン・L・ライト

ゆるやかな起伏を見せながら、どこまでも広がる北モンタナの夏の大平原。高く生い茂った草をざわめかせる風が、ある小さな軒屋のみすばらしい壁板に吹き付け、うなるような音をたてていました。その家は、この広大な地のはずれに寂しうに建っていました。そして家の近くをミシシッピとの合流点目指して、ミズーリ川がとうとうと流れていました。時折、はずれかかった壁板が強い風に吹かれて、カタカタとその家の住人にも聞こえるほどの音をたてていました。

その日は日曜日でしたが、この見渡す限りの大平原は、人の手になる2,3の卑小な造作がなければ、遠い昔からそのままの姿をとどめた、時の移ろいをまったく忘れさせてしまいそうな所でした。何もかもが昔のまま、時空を超越した世界のようにでした。

家具と名の付く物などほとんどない、一間だけのこの寂しい一軒屋に住むポインティング・アイアは、かつてはあの誇り高き偉大なスー族の勇敢な戦士でしたが、すでに年老いて体も弱り、古びたベッドに身をゆだね、寝たきりの生活を送っていました。

その居留地内のインディアンの家の中の様子は、どれを取ってもほとんど同じようなものでした。彼はそのうつろな視線を、厚い板紙で覆われた部屋の壁に投げかけていました。ところが、彼のそのあてどない視線が色あせた古い写真や昔の記念の品々の上にとどまった瞬間、彼の明敏な心の中に、次から次と、遠く過ぎ去った日々の思い出がよみがえってきました。ポインティング・アイア自身も自分の年が幾つかを覚えてはいませんでしたが、彼を知る人の中にも、それを知っている人はだれもいませんでした。それでもスー族の仲間たちと

楽しく過ごした時代のことがあふれるように心の中に浮かんできました。彼はその人生の中で、何度も何度も数多くの冬を過ごしてきていました。

ポインティング・アイアンはその日が何の日かを忘れてはいませんでした。そして太陽が真昼を指し示すのを、期待に胸をはずませながら待ちかまえていたのです。正午近くになると、かつては強力で知られたその腕を伸ばし、老いさらばえた身を覆う毛布とすり切れたキルトを整え、両の肩から真直ぐに垂れる美しい銀髪の三つ編みに節くれだった手をやりました。髪をきちんと整え、どんなに辛くても首を誇り高く上げておくことは、決して忘れてはならない大切なことでした。

彼はその時の到来を今や遅しと待ち構えていました。間もなく強くノックする音があり、ドアがきしみながら開きました。そして地味な衣服に身を包んだふたりの宣教師が、吹きすさぶ風を逃れてほっとした様子で中へ入ってきました。

ポインティング・アイアンは待ち兼ねていたようにその腕を差し伸べ、大切な用件で自分の粗末な小屋を訪ねてくれたふたりの宣教師と握手を交わしました。ポインティング・アイアンも長老たちも、相手の言葉は互いにほとんど話せませんでした。しかし、交わす言葉は少なくとも、彼らは皆、自分たちの心がひとつに通い合うのを感じることができたのです。

それでも長老たちはスー族の言葉で書いた一冊の讃美歌を持っていました。ひとりが讃美歌を選んでいる間に、もうひとりが針金で結わえ付けただけの古びた木の椅子を部屋の真ん中に運びました。そして、その上にアイロンがきれいにかけられた清潔

な2枚のハンカチを静かに広げ、きれいな小さい皿を置きました。皿には小さなパンのかたまりを入れ、その隣には澄んだ井戸水の入った小さなコップを置きました。聖餐式の準備はすべて整いました。

讃美歌が開かれ、3人は「祈りは楽しき」を心を込めて歌いました。ひとりの宣教師が開会の祈りを捧げた後、先輩同僚がひざまずいてパンの祝福をしました。皿が差し出されると、ポインティング・アイアンは震える手を伸ばし、小さなひとかけらのパンを取りました。それは御自身を犠牲にされた愛する救い主の体の記念でした。日焼けしたしわだらけの彼のほほを、涙がゆっくりと伝い落ちました。

水が祝福され、ポインティング・アイアンがそれを受けた後、長老たちは再び讃美歌を開き、共に声を合わせて「悩めるイスラエル」を歌いました。後輩同僚が閉会の祈りをしてから、椅子とその上のものが片付けられ、聖餐式は終わりました。ポインティング・アイアンは再び誓約を新たにしました。長老たちはその場を立ち去り難い気持ちでした。モンタナの平原にある、この古びた一軒屋で強く感じた霊的な思いが、別れを名残惜しくさせたのです。

しかし、ようやく彼らは愛する兄弟と握手をして別れの言葉を告げ、吹きすさぶ草原の風の中に出て行きました。しかし、どういうわけか、その風はもはや何の苦にも感じられませんでした。

この聖餐式は週に1度の安息日の大切な任務でした。年老いた勇敢な戦士ポインティング・アイアンがこの世の生涯を終え、チキン・ヒルの大きな古いインディアン共同墓地に安息を得るまで、ふたりの長老は喜んでその務めを果たしたのです。

# 「高慢と偏見」

スーザン・エバンス・マックランド



「私はあなたに大変な間違いをしてもらいたくないのよ、ミツシエル。私たちの言う通りにすれば間違いはないわ。」

**私** は本の裏表紙の袋に貸し出しカードをはさんで女の人に渡し、それから顔を上げてローリーの大きなブルーの目を見た。その目はさっきから、鼻のまわりのそばかすの間からじっと私を見つめていた。

「ブリガム・ヤング大学から何か言ってきた？」ローリーは目を輝かせながら聞いた。

「私よりもあなたの方が気にしているみたいね」と私は笑ったが、本当はそうではなかった。私の一生、これから起こることすべてが、まだ見たこともない人の下すこの決定の上にかかっているとまで私は考えていたのである。

「絶対入学できるわよ。」ローリーは机の向こう側へまわって、返却期限の過ぎたカードの整理をしながら言った。「この2年間あなたのような成績なら絶対よ。それに教会会員にもなったし。そうよ、問題はないはずだわ。ユタへ行って、あの山々に囲まれてBYUで学べるなんて、本当にうらやましいわ。」そう言ってローリーはそばかすだらけの鼻にしわを寄せた。

「大学側は私が改宗したばかりだということ知らないのよ。ローリー、あなただっとうも2年すればBYUへ行くんでしょ。」

「2年ね、今行こうとしているあなたと比べたら、ずい分遠い先のことっていう気がするわ。」ローリーはため息をもらした。

私は笑いを抑えることができなかった。ローリーは優しく、心の広い誠実な人だった。4つも年下であるが、私にとってだれよりも心の許せる友だった。福音を教えてくれたのも彼女だった。私の人生を変えた人である。私の知っている唯一のモルモンの少女であるローリーは、まさに教えの見本のように思えた。

私は雑誌の山を棚に運び、分類して正しく並べた。私は16の時から毎年夏になるとこのフランクリン市立図書館で働いた。マジソンの大学に行くために2年間離れていたが、それでもこの仕事はハイウイスコンシンの森のすみにある人口7千人の市で私が見つけ得る最高の仕事だったのである。

去年の夏、図書館はふたりの高校生を雇った。そのひとりがローリーであった。親しみがあり、話好きのローリーはみんなと仲良く働き、だれもが彼女のことを末日聖徒だと知るようになった。モルモンやブリガム・ヤング大学という言葉は、学校で歴史書を読んで知っていたが、詳しいことは

何も知らなかった私である。なぜだかわからないが、この少女を見て、これまで考えたこともなかったモルモンやその大学のことが急に気になり、もっと知りたいという気になったのである。

それは1年前のことだった。わずか1年で、これほど人の生活が変わるものかと驚いている。福音を聞き、教会に入ることによって、私の生活は180度変わった。活動も、友達も前とは違う。考えることも、望むことも変わった。以前よりもはるかに幸福であるのに、一方でみじめな私である。

両親にバプテスマを受けたいと言ったあの日のことを思い出すと、今でもぞっとする。両親は私がモルモンについて学び、集会に出席していたことも知っていた。でも私が真剣に考えているとは思っていなかったようだった。口数の少ない優しい父は、反対とも賛成とも言わずにじっと考えていた。でも母の思いはすぐに態度に表われた。顔からは血の気がひき、口は固く閉ざされた。

「絶対に反対ですよ、ミッシェル。」何とも冷たい、激怒の声だった。「絶対許しませんから。このことは二度と口にしてはいけません。」

「なぜ、なぜなの？」

「なぜですって。」言い返してきた母の目は怒りに燃えていた。「あなたは自分が何をしているのかわかっていないのよ。私はあなたに大変な間違いをしてもらいたくないのよ、ミッシェル。私たちの言う通りにすれば間違いはないわ。」

私は、母がモルモンをどう考え、モルモンについて何を知っているのだろうかと思ひ、母にしつこく聞いたが、母は何も答えてくれなかった。ただ断固いけなげと言うだけだった。最後に父が口を開いた。思慮分別があり忍耐強い父はいつもこうだった。父は母に向かって、私がもう20歳になることを考えるようにと言った。あと数カ月もすれば、私は自分で決定できるのである。親の許可がなくても。ミッシェルは心の優しい、賢い子だ、勤勉で従順で、正直な子だ、自分の道は自分で見つけられる子だ、と父は母を優しく説得していた。

私がこれまで神学を学んだ教会の牧師に会うことで、話はついた。今まで属していた教会の信仰と教義についてできるだけ多くのことを学ぶことになった。すなわち、両親の勧める道にもう一度だけチャンスを与えるということである。それは同時に、モルモンにチャンスを与えることであった。それでも私がこれまで属していた教会を離れたくない、親の勧める道を退けて末日聖徒になりたいと思うなら、仕方なく同意しようというのである。

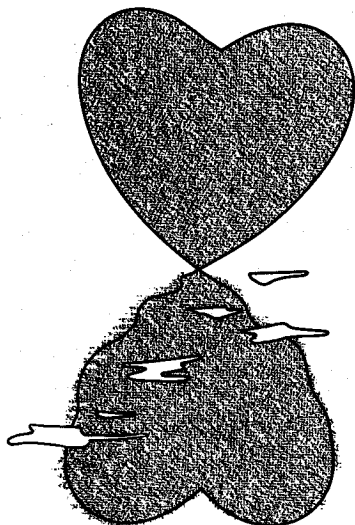
私は立ち上がると、メインデスクに歩いた。そこには本棚に戻す本がカートに積み上げられていた。カウンターの奥で本をチェックしながら、ローリーが私に笑いかけた。

「それは私がするわ。だからここに来て私の後を引きついでくれない」と彼女が声をかけた。

「大丈夫よ」と答えると、私はカートを



翌週私はバプテスマを受けた。家族はだれも出席してくれなかったが、これが私の望んだ道であり、親の許可も得ていた。でも、許可を得ることと支持を得ることは違う。



フィクションの棚に押し行き、「ア」のところで止まった。アダムス……アンダーソン、アシュレー……。本を1冊1冊棚に戻していった。私は、「高慢と偏見」という題の本を取って本棚に入れた。高慢と偏見か、私は皮肉を込めて笑った。この数カ月の私の生活にあまりにもびったりなタイトルだったからである。

牧師を訪れたことによって、私は生涯忘れられない厳粛な経験をすることができた。親に言われるままに重い足を引きずりながら、石造りの古い教会に続く道を歩き、重い入口の扉を開けた時のことを、今でもはっきりと覚えている。磨かれた堅い床を歩く足音だけがいやに響いていた。牧師の部屋のドアをためらいがちにノックした。牧師の部屋を見ただけで圧倒されてしまった。厚いカーペットが敷き詰められ、一方の壁

には古くて分厚い、いかめしい本の詰まった棚がずらりと並んでいた。オールレッド牧師は大きな机を前に、茶色の皮張りの椅子に腰かけていた。その机をはさんで、私は牧師の真向かいに腰を下ろした。

「ところで、あなたはモルモンになりたいと思っているそうですね。」牧師はいきなりこう切り出してきた。顔色はまったく変わらなかった。牧師が何を考えているのかさっぱりわからなかった。あれこれ考えていると、牧師はこう言ってきた。「あなたがここに来たのは、御両親のお考えですね。」

うなずく私を、牧師はずっと見つめ、やがてきりっとしまった細くて長い口もとにかすかに笑みを浮かべた。「じゃ、どうすればいいか、考えてみましょう」と言いながら、机に身をのり出した。

私は牧師を3度訪れ、そのたびに手渡さ

れた本とパンフレットを読んだ。私が彼の質問に答えたり、彼が私の質問に答えてくれたりしたが、話し合いはいつも礼儀と慎みのあるものだった。最後の日に、牧師は机の向こうから私を見つめていた。そしてその日話し合うことになっていた厚い本を閉じた。牧師はおもむろにまゆ毛を上げるとこう言った。「あなたの御両親の望まれたことはすべてしました、ミッシェル。私があなたに教えられることはもうありません。それはあなたにもわかっているはずです。もうあなたは自分で決定しなければなりません。」

牧師は何かちゅうちょしているようだった。牧師の表情に引きつけられ、その優しい声に何かを感じた私は、いつしか身をのり出していた。すると突然、牧師は椅子を押し立て立ち上がり、書棚に静かに近づき、1冊の小さなうすい本を取り出した。机に戻った牧師は、その本を私の目の前に差し出した。皮表紙の文字がよく見えてきた。そこには「モルモン経」と書いてあったのである。

「そうです。これはモルモン経です」と牧師は言葉を添えた。「私はこの書物から説教の題材をいただいているのです。」牧師の声は穏やかだったが、心の奥底までしみわたり、私は胸が高鳴るのを覚えた。そして温かく、そくそくするような思いを感じた。

「できることなら、私もモルモンになりたいと思います。」牧師はモルモン経を手を取ると言った。「でも私は牧師です。それが私の生きる道です。みんなそうでした。父

も牧師でしたし、祖父もそうでした。」彼はしばらくじっと見上げていた。その目は何とも悲しそうだった。「もし私があなたなら」と牧師は、柔らかいがしっかりとした口調で続けた。「私は末日聖徒イエス・キリスト教会に入らなう。」

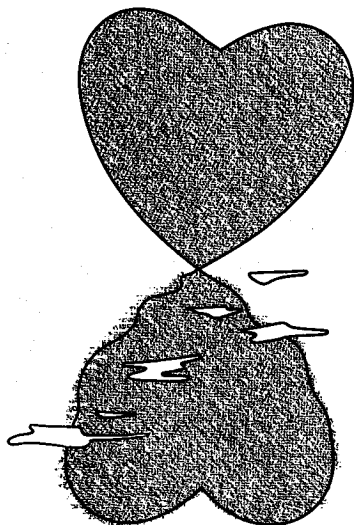
オールレッド牧師は立ち上がり、本を書棚に戻した。私も席を立った。交わす言葉はもうないと思っていたが、私の思い違いだった。牧師はドアの前で私を見つめながら、温かい握手をしてくれた。「今晚私がお話したことは、あなたの心の中に留めておいて下さい。他言した時には、そんなことは言わなかったと否定しなければなりません。私とあなたのどちらの言うことを人は信じるか、それはあなたにもわかるでしょう。」

私は目でうなずいて、ほほ笑んだ。圧倒されて、それ以外のことはできなかった。何ともしがすがしい静かな夜を、ひとり家に向かった。

翌週私はバプテスマを受けた。家族はだれも出席してくれなかったが、これが私の望んだ道であり、親の許可も得ていた。でも、許可を得ることと支持を得ることは違う。あの優しい父も、賛成も理解もしていないことに対して援助の手を差し伸べようとは言えないようだった。

母は自分のまわりに堅い殻をめぐらし、私に対してバリケードを張った。「仕方ないわ。だんだんわかってもらえる。難しいかもしれないけれど。それまで我慢しなければ」と私は自分に言い聞かせた。

「モルモン教会に入ったその時から、あなたは私たちや私たちの大切にすすべてに背を向けたのよ。もう私たちの家族じゃないわ。」



しかし受け入れるそぶりも見せない母だった。数週間後、だれもが落ち着きを取り戻し、前と変わらぬ生活にもどった。そして、私がモルモンになったという事実を家族全員が無視した。私がどれほど変わったか、家族は理解していなかった。興味も示さなければ、気にもかけてくれないのである。つれない家族だった。私にはだれも話しかけてもくれない。私なりにたくさんのことを学び、見だし、成長していたのだが、家に帰ると、だれも何も聞いてこないし、知りたいという様子さえ見せなかった。きっと、無視すれば、そのうち消え去ってしまうと考えたのだろう。それにしても母は弟や妹たちには何をしたのかなどによく聞き、楽しく笑ったりしていたが、私には話しかけようともしなかった。ひとつ家に住んでいながら、そんな具合の毎日だった。

意思の疎通もなければ、心づかいも、思いやる気持ちももうなくなっていたのである。

1年以上も交際してきたボーイフレンドのブライアンもあまり来なくなっただと思っ  
ているうちに、電話もまったくくれなくな  
った。ふたりの共通点がもうないからだ。  
高校時代からの親友で、よく映画に行こう  
とか、レコードを聴こうとか、泳ぎに行か  
ないとか言ってきたコーリンでさえ、も  
う何も言ってこない。彼女が悪いのでもな  
いし、私が悪いのでもない。私はパズルの  
半端の1枚で、私の埋める所はなかったの  
である。

支部に若い会員たちが幾人かいれば助け  
てもくれただろう。でも、フランクリン市  
の支部は小さくて、青少年と言ってもロー  
リーと彼女のふたりの弟だけだった。支部  
も成長してきているので、青少年もやがて

は増えるだろうが、今のところ、先の3人に私に加わったにすぎない。

空のカートを机のところに戻すと、もう終了時間だった。

「大丈夫？ 元気ないみたいだけど」とローリーが声をかけた。

「ちょっと考え事」と私は答えた。ローリーは優しくしたが、私の苦しい胸の内を本当にはわかっていなかった。彼女は教会員の家庭に生まれ、両親は信仰の強い、熱心な教会員だったからである。彼女の家では家庭の夕べも家族の祈りも行っていた。そんな彼女に、母親に相手にされないこと、また弟たちから荒々しい言葉を投げかけられること、父の困惑した悲しい目を見るのが一体どういうことなのか、わかるはずがない。

私は図書館を出て、駐車場に向かった。夕方になり、日中の日差しも和らいている。松や、図書館の壁をはうバラの香りがさわやかだ。私の心は晴れ、すがすがしい気分になった。私のしていることは間違っていない、そう実感する私だった。そのことについてはこれまで断食し祈った。今は、信仰を持って、決心したことを行ない続けるだけである。

玄関に入ると、脇のテーブルの上に置かれた白い封筒が目にとまった。私の名前がタイプされており、すみにブリガム・ヤング大学とあった。ふるえる手で封を切った。入学が認められた。それに、ウイスコンシン大学のカウンセラーが推薦してくれた奨学金も受けられることになったのである。

私はその手紙を何度も何度も読んだ。信じられないが、夢が実現したのだ。

ふと顔を上げると、玄関に母が立っていた。「何も言わなくてもいいわ、あなたの顔を見れば察しがつくわ。」

「お母さん……」私が話そうとすると、母の目には激しい怒りが表われていた。

「あなたは自分を何様だと思っているの。うぬぼれが強くて、ひとりよがりな自信過剰家じゃないの。私の姉のベスとそっくりよ。姉がどんな人だったかあなたも知っているでしょう。ベスは私たちを見捨てていったのよ。あなたもそうしようというのね。」

「お母さん」私はたまらなくなつて叫んだ。「私はお母さんを見捨てたりしないわ。大学で勉強するために、9カ月だけ家を離れるだけよ。」

「そう、ミッシェル。でも戻ってこなかったらどうなるのよ。ベスはそれっきり帰ってこなかったわ。」

「それは違うわ。おばさんは恥ずかしいことをして、おじいちゃんが追い出したのよ。そして戻れないようにしたのよ。」

母は私にきつい視線を向けていた。「モルモン教会に入ったその時から、あなたは私たちや私たちの大切にすすべてに背を向けたのよ。もう私たちの家族じゃないわ。あなたがユタへ行くというなら、それで最後の絆も切れるってわけね。」

「お母さん、お願いですから、そんなこと言わないで。」私は母にすがろうとしたが、身をかわされてしまった。

「私に向かって、よくもこんなことがで

きたものね。」母は大きな声を上げた。「自分勝手な冷たいことがね……。ベスは妹の私を見捨てたわ。姉が一番いてほしい時に、私から去っていったのよ。ミッシェル、あなたもベスと同じね。そっくりだわ。」

私は台所にとび込むと、裏口から静かな庭に出た。夏の夜はさわやかなのに、私は寒ささえ感じ、震えが止まらなかった。母が家出したベスおばさんと私のことを一緒に考えているなど、思ってもみなかった。厳格な父親に勘当され、家を追われてどこかでひっそり人生を送っているベスおばさんの話は前からよく知っていた。子供心に、甘く悲しいロマンチックな話だと思っていた。でも、この私がお話の主人公にさせられるとは考えてもみなかった。母はどうして私も同じような道をたどると考えているのだろうか。私のことを恥ずかしいと思っているのだろうか。祖父がその昔、母の好きだった姉を勘当したように、私を勘当したいと思っているのだろうか。

その夜、弟のポールが部屋に入ってきた。「少し言いたいことがあるんだが、姉さんはひどいよ。」

「ひどいって、どういうこと？」私は聞き返した。

「わかっているくせに。お母さんを怒らせたりして。わめき散らして僕らみんなが悪いと言ったり、夜になっても泣いているし、もう面倒はたくさんだよ、姉さん。」

「ポール、それは違うわ。」私ははっきりと言った。胸につかえていたものがだんだん大きくなり、非難されるたびに謝る自分

が間違っていることに気づいた。「私、面倒を起こした覚えはないわ。」

「そう言うけど、実際起こしているよ。姉さんはしたいことをしているからいいよね。だけどおかげで家族みんながみじめな思いをしているんだよ。」

弟は私に弁解の余地もくれずに、さっさと部屋を出ていった。涙があふれそうになった。あまりに一方的で冷たい言葉だった。でも、どうしたら弟に本当のこと、私の心の内を理解してもらえるのだろうか。

その後、妹のケティーが、お休みなさいを言いに来た。大きな純真そのものといった目で私を見上げ、こう言った。「お姉さんはどうして私たちのところから逃げ出したいの？お母さんが言っていたけど、お姉さんはもう私たちのこと愛していないって、だから出て行くんだって。」

私はケティーを引き寄せて、しっかりと抱きしめた。「そうじゃないわよ、ケティー。お姉さん、あなたのこと大好きよ。私が出て行った後、楽しみにしててね。毎週ケティーに手紙を書くわ。それに、小包も送るわよ。」

妹の顔に喜びが少しもどってきた。私は妹を抱きしめて、何度もキスをしてあげた。私はベッドに入ったが、なかなか眠れなかった。母は何をしようというのだろう。自分の思い通りにならないからといって、なぜ私につらく当たるのだろう。

それからというもの、来る日も来る日もゆううつだった。時には母に腹を立て、仕返しをしたいと思ったりした。そうかと思

うと、まるで小さい子供のように、自分では何もできないように感じて怖くなり、母に抱き締めてもらいたい、慰めてもらいたい、涙をふいてもらいたいと思うこともあった。母のために、将来に対する期待と興奮に水をさされてしまった私は、弱気になり、行くべきではないのかなとも思ったりした。でも、祈りは何度も答えられてきたし、進むべき道はこれだという知る辺も、与えられすぎるほど与えられている。私はいつも、万事は好都合となると自分に言い聞かせていた。私が出て行けば、家族はもっと気持ちが楽になるだろう。摩擦と不和の原因である私が近くにいなければ、家族は私のことを理解しやすくなるかもしれない。大きな心で思いやりを持って私を見てくれるかもしれない。そして、少しは私がいなくて寂しいと思い、私の存在を認めてくれるだろう。

でも不安だった。それに理解してくれる人がだれもいなかった。ローリーだけが、私の今の状態をわかってくれ、シオンに行くことによって、すべてが光輝き、喜びとなり、夢が実現することを知っていた。でも、ユタは生まれて初めて行く地だった。山に囲まれて生活するというのがどういうことか私は知らなかった。それにユタに知っている人はだれもいなかった。ましてブリガム・ヤング大学に知人がいるはずがない。他の地のモルモンはどんな人たちのだろう。みんなと違うことをしたり、変なことをしたら、私のことを笑うのだろうか。これまでいた小さな支部は気楽で、失敗し

ても大丈夫という雰囲気だった。末日聖徒が何百人も集まった光景はどんなだろう。みんなが福音について私の10倍も知っていたらどうしよう。

長かった日々も過ぎ、出発の日が迫ってきた。マジソンの空港行きのバスに乗る前日、私は断食して祈った。自分を見捨てていくと母から思われ、憎まれて、ちょうどその昔おばがそうだったように母の元を去りたくない、と私は思った。

その夜、私は夢を見た。夢の中の私は顔を汚した、おさげの女の子だった。男の子たちに追いかけられ、夢中で走っていたが、ころんでひざをすりむいてしまった。私はよろよろと立ち上がって、芝生の上を走り抜け、べそをかきながら、お母さん、お母さんと呼んでいた。すると母がそこにいて、大きな優しい腕に私を包み込んでくれた。私の髪をなで上げ、ほおにキスしてくれた。それからすりむいたひざをきれいに洗って赤チンをぬって、大きなバンドエイドを張ってくれたのである。母の柔らかい手に触れ、優しい笑顔を見た私は、パッと目が覚めた。

ベッドに起き上がって私はハッと思った。母は、私が母をどんなに必要としているか気づいていないのだ。母に助言や助けを求めたのはいつだったろう。母の目には、私が自分で何でもできる力があり、自信満々に映ったのだろう。モルモンになったことで自分の生活から母を締め出し、その埋め合わせを何もしていなかった自分に気づいた。前と変わらずに母を愛し、必要とし、

大切に思っていることを母にわかってもらおうと努力しなかったのである。この数カ月というもの、悪いのはみんな母の方だと考え、私はひとりで傷つけられたと思いつ込んでいたのだ。

次の朝、私は母に荷づくりを手伝ってほしいと頼んだ。母は賢い人であったから、出発前ぎりぎりでも、私にはとてもできない方法で上手に荷物をまとめられることを私は知っていた。そのことを母に話し、母を誇りに思っていることを伝えると、母の顔からは固い困惑の色はすぐに消え去った。そして私たちは一緒に仲良く荷づくりに取りかかったのである。奇跡と言うにはあまりに瞬間的なことだった。私がこれまで母に、どんなに不安であるか、また母を愛し、母と別れるのが寂しくて仕方ないことを、告げなかったのがいけないのだ。今では母の目に怒りの冷たさはなかった。母はバス停まで見送ってくれた。私は手紙を母の手に握らせ、両手を差し伸べると、母も手を広げて私を抱きしめ、キスしてくれた。私は必死で涙をこらえた。私が家族のみんなを心から愛していることを知ってもらいたくて、窓越しに一生懸命に手を振った。

飛行機がソルトレーク空港に近づく頃には、旅の疲れと感情の高ぶりでくたくたになってしまった。下にロッキー山脈が見えた。陽が沈もうとしており、美しい峰々や岩の裂け目、刻々と変わる雲と影が目の前に映し出された。

やがて空港に到着した。私は混み合うタ

ーミナルへと人々に押し流されるように進んでいったが、一緒に歩くだけでもが出迎えの人がいて、行く先が決まっているように思えた。それに比べ、この自分は何をすればいいのか、次にどこへ行けばいいのかもわからず、足が重かった。その時、向こうから年輩の女性がやってくるのが目に入った。とても魅力的な人で、美しい髪の優しいような婦人だった。近づいてくるにつれ、もしかしたら知っている人かとも思い、もう一度よく見てしまった。やはり私の方に向かってくるようだった。私はきびすを返して、床に目を落とした。でもその人が私のすぐそばに立ったので目を上げると、ほほえみかけてきたのである。前にどこかで見たことがあるという思いがだんだん強くなった。

「ミッシェル？」とその人は自信なさげに尋ねた。「ミッシェル・ブリッグスでしよう。」

「は、はい。」私はどもってしまった。

「きっとそうだと思ったわ。お母さんにそっくりですもの。お母さんによく似て美しい目をしているわ。」そう言ってほほえみかけるのだった。「驚かすつもりはないのよ。私はあなたのおばのベスです。」

「まさか。」私は思わず声を上げてしまった。「ここで何をしていたらしゃるのですか。どうして私がここに来ることがわかったのですか……。」

「あなたのお母さんが教えてくれたのよ、ミッシェル。」そう言って優しく私の手を取った。「これまで何十年もの間、私はあなた

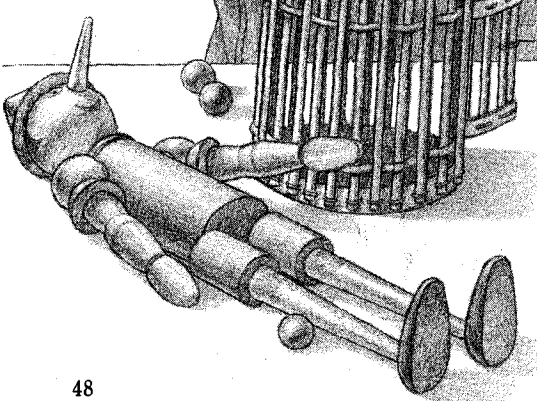






# こころ の うた

ヘイゼル・エム・トムソン



フ オレンスの町に、テル・グリ  
 口の祭りまつりが近づちかいてきました。  
 ロマノのちょ金きんも、たまりました。  
 ほしかったコオロギかも買えます。

ポケットの中で、お金をジャラジャラいわせながら、ロマンは虫屋さんの店へいそぎました。

歩きながら、ロマンはお父さんやお母さんの顔を思いうかべました。ロマンの小さな弟が生きていたころは、家の中に歌声がたえたことがなかったのです。でも、今ではだれも歌いません。わらうことさえありません。

ロマンはずっと考えていました。「お金をためて、ココロギを買おう。デル・グリコの祭りの日にココロギが鳴いてくれれば、きっと、みんな楽しい気持ちになれる。だって、ココロギはしあわせをはこんでくれるんだもの。それに、ココロギのコンテストにも出よう。」

ロマンは、お店に入っていました。「よく鳴くココロギをください。ほら、この虫カゴ、ぼくが作ったんですよ。」

「こいつは、りっぱだ。うちの店には、その虫カゴにまけないココロギがいるよ。ほーら、こいつはよく鳴きそうだ。」

「それじゃあ、それをください。」

帰るみちみち、ロマンは、ちよつと立ち止まっては、虫カゴを耳元へもっていきました。でも、鳴き声は聞こえませんでした。「ぼく、鳴かないココロギを買っちゃったのかなあ。」ロマンはしんばいになりました。

「そんなことないさ。きっと鳴く。」ロマンは気をとりなおして、アパートへと歩きました。

中へ入ると、ロマンはお父さんやお母さんにいました。「ねえ、すてきなココロギでしょう。今に、ココロ鳴きだして、しあわせをはこんでしてくれるよ。」

「帰り道では、鳴いたの。」お母さんは聞きました。

「ううん、まだ鳴かないんだ。」

「きっと、おなかがすいているのよ。」

「そうだね。ぼく、レタスのはっぱをとってくる。おなかがいっぱいになったら、きっと鳴くよね。」

ココロギは、ちぢれたはっぱを、すぐに食べはじめました。でも、鳴きませんでした。

その夜、ロマンのアパートは、しんとしていました。ロマンは、弟が

いたころのことを思い出しました。そのころは、お父さんやお母さんもギターをひいたり、歌を歌ったりして、ロマノも弟といっしょに、よくキャッキョとわらったものでした。

デル・グリコの祭りの朝が来ました。ロマノは一番いいズボンをはき、真っ赤なシャツを着て、お父さんやお母さんといっしょに出かけました。歩くたびに、お母さんの青いだんだんの花のようなスカートが、きぬずれの音をたてました。でも、コオロギの声は聞こえませんでした。

お祭りの音楽が聞こえはじめました。広場は人でいっぱいです。お店もたくさん出ていて、コオロギも鳴っていました。コオロギのコンテストのしんぱんが、ロマノのコオロギの近くに、何回かやってきました。ロマノは虫カゴのそばをはなれず、  
「きつと鳴いてくれる」としんじて聞き耳を立てていました。でも、とうとうロマノのコオロギは鳴きませんでした。ロマノは、くらい気もちでアパートへ帰って行きました。

夕やみのせまるころ、ロマノは虫カゴをもって、またアパートを出て

行きました。町をはなれたおかに、コオロギをはなしてやろうと思ったのです。おかにのぼると、虫カゴの戸をあけました。すると、コオロギは外へとび出して、ロマノがあんなにまっていた歌を歌いはじめたのです。「やっぱり、やっぱり歌い出した。でも、おそかったよ。」そうロマノはつぶやいて、くるりとせ中をむけると家へ帰って行きました。

アパートの近くまで来ると、まだに明かりが見えました。明るいへやの中で、お父さんとお母さんがまっています。ロマノは、虫カゴをもち上げて見せました。お父さんは、おどろいたような顔をしました。

「ぼく、コオロギをはなしてやったんだ。」

すると、お母さんがうなずきながら、「いいことをしたわね」といいました。

ロマノは、首をふりながらいいました。「でも、もう、しあわせは来ないね。このへやの中で、1回でも鳴いてくれたら、しあわせが来たのに。」

すると、お父さんがいすから立ち上がって、ロマノのかたにうでをま

わしながらいいました。「そんなことは、いいじゃないか。どうだい、心こころの中なかはしあわせじゃないかね。お前まえは、小こさなコオロギをしあわせにしてやったんだ。いい子こだ。」

ロマノは、お父とうさんとお母かあさんの顔かおを見み上げました。ふたりは、ニコニコわらっていました。ロマノが長いこと見たことながのなかつた、あのえ顔かおでした。

ロマノの心こころの中なかに、あたたかいも

のがそつとしのびこんできました。そして、ロマノは自分じぶんでも氣きづかないうちに、歌うたい出いしていました。






# ひふでわかるって

## すばらしい

ベッツィー・オバンド

 をとじて、なにかにさわってごらんなさい。  
あたたかいかな。つめたいかな。かたいかな  
あ。やわらかいかなあ。それとも、すべすべしてま  
すか。それとも、モゾモゾうごくかな。

どうして、それがわかるんだろう。それはね。ひ  
ふがあるからです。ひふには、<sup>ちい</sup>小さなしんけいがあ  
って、なにかにさわると、感じるんです。

この<sup>ちい</sup>小さなしんけいのことを、「かんかくきかん」  
といいます。「かんかくきかん」には、ひふのおもて  
にあるのも、おくにあるのもあります。

たとえば、かみの毛<sup>け</sup>をギュッとひっぱったら、い  
たいでしょう。

それから、人のからだには、「かんかくきかん」が  
たくさんあるところと、すこししかないところがあり  
ます。ゆびさきと、せなかと、どっちがたくさん  
あるだろう。そうです、ゆびさきのほうが、ずっと  
たくさんあるのです。

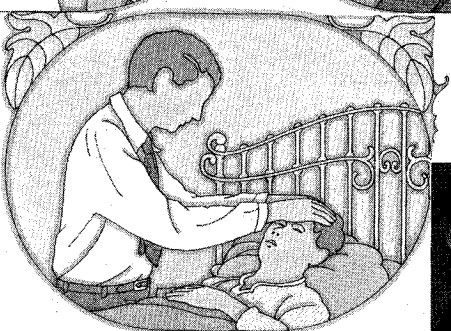
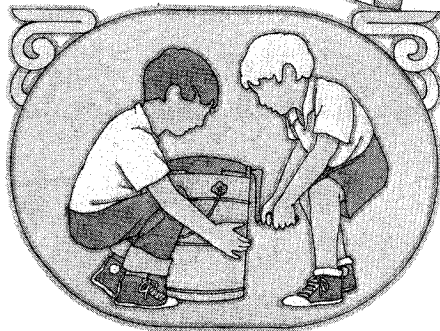
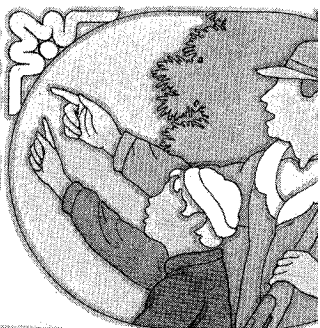
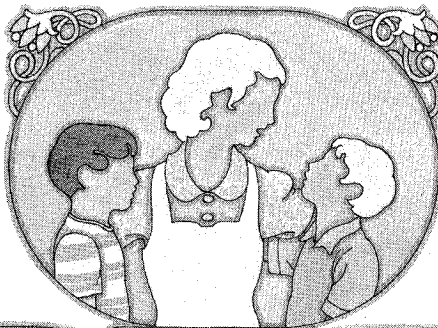
ひふがなにかにさわると、「かんかくきかん」は、  
すぐに、のうへしんごうを、おくります。のうは、  
そのしんごうをうけとって、「あついですよ」とか、  
「やわらかいですよ」と、おしえるのです。

すごくいたいときや、あついときは、「手をはなし  
なさい」とか、「足をどけなさい」と、めいれいしま  
す。「かんかくきかん」は、とてもす早く、はたらき  
ます。

ひふがなにかにさわっても、なんにもかんじな  
かったら、どうでしょう。つまりませんねえ。だって、  
バラの花の花びらの、すべすべしたかんじも、どろ  
んこの、グチャグチャしたかんじも、わからないん  
ですもの。

それに、もしも「つめたい」ってかんじなかつた  
ら、アイスクリームだって、おいしくないでしょう。  
つめたくて、サクサクするアイスクリーム、ひふで  
わかるって、すばらしいですね。

# わたしの お友だち へ

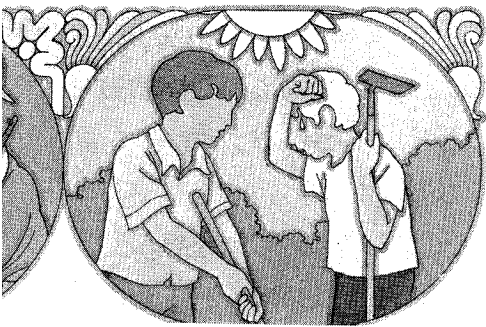


へんしゅうぶでは、七十人<sup>しちじゅうにん</sup>だ  
いていいん<sup>い</sup>会の、ジーン・ア  
ール・クック<sup>かい</sup>長ろう<sup>ちやう</sup>に、インタ  
ビュー<sup>はなし</sup>をして、いろいろとお話  
をお聞き<sup>き</sup>しました。

**わ**たしは、ユタしゅう、リ  
ーハイの小さな<sup>ちい</sup>びようい<sup>い</sup>んで、  
生まれ<sup>う</sup>ました。お父<sup>とう</sup>さんとお母<sup>かあ</sup>  
さんは、女の子<sup>おんな</sup>がほしか<sup>こ</sup>つたの  
で、わたしにジーン<sup>な</sup>という名<sup>な</sup>を  
つけました。(ジーン<sup>な</sup>という名<sup>な</sup>は、

男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>にも女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>にも、つける  
ことができます) 小さい<sup>ちい</sup>ころ、  
わたしにはあだ<sup>な</sup>名<sup>な</sup>がありました。  
お母<sup>かあ</sup>さんがつけた<sup>つけ</sup>たのですが、モ  
ゾモゾ<sup>むし</sup>虫<sup>むし</sup>っていうんです。なぜ、  
そんなあだ<sup>な</sup>名<sup>な</sup>をつけられてしま  
ったかという<sup>い</sup>と、しゅう会<sup>かい</sup>の時<sup>とき</sup>、  
ぜんぜん<sup>ぜん</sup>しずかに<sup>しず</sup>すわ<sup>すわ</sup>っていら  
れなかつた<sup>な</sup>から<sup>な</sup>のです。

わたしのお母<sup>かあ</sup>さんは、けんか  
のなかな<sup>な</sup>お<sup>お</sup>りを<sup>り</sup>させ<sup>せ</sup>るのが、じ  
ょうず<sup>じやう</sup>でした。<sup>きやうだい</sup>兄弟<sup>けい</sup>げん<sup>げん</sup>かを<sup>を</sup>し



ても、すぐにわすれさせてくれました。近くの子となかたがいらしたりしても、すぐになかよくさせてくれました。それに、ものを教えることがじょうずで、わたしたち兄弟に、正しいことが何かを、よく教えてくれました。それに、だれにでも親切でした。

わたしは、お父さんと一しょに、よく「しゅりょう」に出かけました。お父さんがしんでしまってから、ひとりで出かけました。でも、すぐに、つまらなくなってしまうました。お父さんがいないと、楽しくありませんでした。お父さんは、やさしい人でした。ある時、わたし

たち兄弟は、ぎょうさいのしげつた地めんをたがやしていました。わたしたちは、しにそんなほどつかれてしまい、ひとやすみして、みずをのみたいと思いました。すると、お父さんはいいました。「もう1れつ、やっつてしまおう。」それから、アイスクリームを作っていると、こういいました。「それ、あとたつたの10回だ。」お父さんは、自分にきびしくすることや、早ね早おきを教えてくれました。そうして、わたしたちが、いつもど力する子になるよう、たすけてくれたのでした。

わたしが11さいの時、お父さんはこういいました。「自分のきるものを買うお金は、自分でかせがなければいけないよ。それから、でん道のためのちよ金も、はじめなければな。」でん道のめしが来た時、わたしはお父さんにいいました。「ぎん行に行つて、でん道のためのお金を毎月

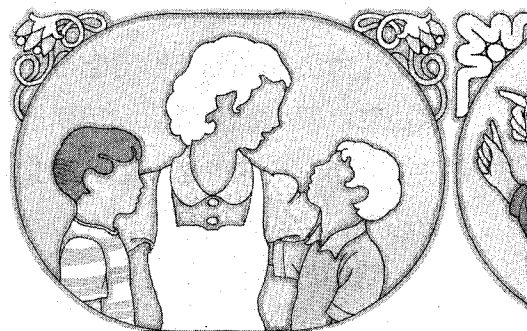


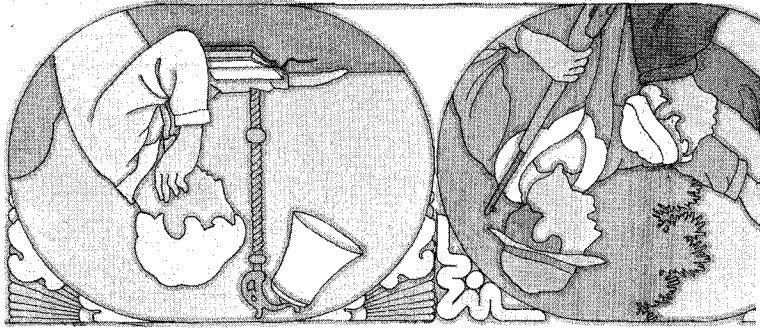
おくってもらえるようにしておかなければならないんだ。」すると、お父<sup>とう</sup>さんはいいました。わたしは、そのことばを、けつしてわすれないでしよう。「お前<sup>まえ</sup>は、父<sup>とう</sup>さんが本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>にでん<sup>でん</sup>道<sup>どう</sup>のためのお金<sup>かね</sup>を出<sup>だ</sup>させるとは、思<sup>おも</sup>っていなかったのじゃあないかね。そうなんだ、父<sup>とう</sup>さんは、ただお前<sup>まえ</sup>にはたらくことを学<sup>まな</sup>んでほしかつたんだよ。父<sup>とう</sup>さんはね、お前<sup>まえ</sup>のでん<sup>でん</sup>道<sup>どう</sup>をたすけるといいうしゆくふくを、なくしたくない。お前<sup>まえ</sup>は、ちよ<sup>きん</sup>金<sup>きん</sup>をしたね。そのお金<sup>かね</sup>は、でん<sup>でん</sup>道<sup>どう</sup>がおわってからつかいなさい。」

兄<sup>あに</sup>のロンも、いつもわたしをたすけてくれました。ある夜<sup>よ</sup>のことでした。ロンは青<sup>せい</sup>少<sup>しょう</sup>年<sup>ねん</sup>のしゆく会<sup>かい</sup>から帰<sup>かえ</sup>つてくると、こういいました。「だれにもたよらずに、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>で自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>のあかしをもちなさいって、先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>からいわれたんだ。」ロンは、まるで「よげん」でもするように、いいまし

た。「ぼくは、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>のあかしをもつんだ。時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>だつて、お金<sup>かね</sup>だつて、いくらかかつたつて、ぼくはかまわない。」

ロンは、せいてんを<sup>よ</sup>読<sup>よ</sup>んで、べん<sup>きょう</sup>勉<sup>けん</sup>しはじめました。そして、だん<sup>だん</sup>じきと、おいのりもはじめました。そうして、ある朝<sup>あさ</sup>、白<sup>ひ</sup>も高<sup>たか</sup>くなつたころ、とつぜん、ロン<sup>からだ</sup>の体<sup>み</sup>の右<sup>みぎ</sup>半<sup>はん</sup>分<sup>ぶん</sup>がきかなくなつてしまったのです。ひどくいたむらしく、ロンはやつとのこととで<sup>くち</sup>口<sup>くち</sup>をひらき、お父<sup>とう</sup>さんにしゆくふくしてほしいといいました。そして、お父<sup>とう</sup>さんがしゆくふくすると、いくらもたたないうちに、ロンは、うそのようになおつてしまったのです。ロン





シー・  
 プール  
 クック  
 長ズボン

このわづらひは、ゆつたりと  
 してきて、それから、まっすぐ  
 におひました。そして、いたみ  
 もとれてしまいました。  
 少しして、おみやさんにお  
 てもらうと、ちゆうすいやはな  
 したようにだけねども、きつあ  
 とがないうことでした。後  
 になつてからは、この時に、エ  
 ルモツクといふと、おみやさん  
 であるといふあかしをもちた  
 のだと話してくれました。しか  
 し、そのことを知つたのは、お  
 父さんにしゆくさくしてもら  
 う前、いやされる前だつたそつて  
 ず。□には、きせきがおこる前  
 に、心からのしんこうをもちて  
 いたのです。

このことがあつてから、わた  
 しの生き方もかわりました。12  
 さいの時、わたしもエルモツク  
 いを、ねこ心にべん強しはじめ  
 ました。そして、わたしも自分  
 のあかしをもち、おみやさん  
 かにしんじてあると、かんじ  
 たのでした。その時からわたし  
 は、エルモツクといふ神さまのみ  
 ことはであること、おみやさん  
 へつてあることを、うたかた  
 たことかありませぬ。  
 せかい中の子どものおみやさん、  
 子どものおみやさん、せいてんを  
 べん強し、おみやさんをしてた  
 さい。そうすれば、おみやさんも、  
 わたしや兄の□のようになり、お  
 かしをもちることが出来ます。

# せいさん

マリーン・エバート



〇〇〇に、ことばをいれよう。

1. 毎<sup>まい</sup>しゅう、日<sup>にち</sup>よう日<sup>び</sup>には〇〇〇〇  
をうけます。
2. せいさんをうける時<sup>とき</sup>、わたしたち  
は、〇〇〇・〇〇〇〇さまをいつ  
もわすれませんとやくそくします。
3. そして、バプテスマの時<sup>とき</sup>にかわし  
た〇〇〇〇をまもることを、思い  
おこします。
4. 〇〇〇〇な気<sup>き</sup>もちで、せいさんを  
うけることは、きよい生<sup>せい</sup>かつをし  
ようとけつ心<sup>しん</sup>する、正<sup>ただ</sup>しい方<sup>ほう</sup>ほう  
です。

5. ○○は、イエスさまの<sup>からだ</sup>体のきねんです。
6. ○○は、イエスさまのちのきねんです。
7. せいさんを○○○<sup>とき</sup>時、わたしたちは、となりびとにほうしすることを<sup>おも</sup>思い<sup>だ</sup>出します。
8. せいさんが、くばられているあいだは、イエスさまの○○○と○○<sup>かんが</sup>について考えます。
9. イエスさまは、わたしたちの○○をあがなってくださいました。
10. イエスさまは、だれでも○○○○できるようにしてくださいました。

こたえ

1. せいさん 2. イエス・キリスト 3. せいさん
4. せいさん 5. せいさん 6. せいさん 7. せいさん
8. せいさん 9. せいさん 10. せいさん

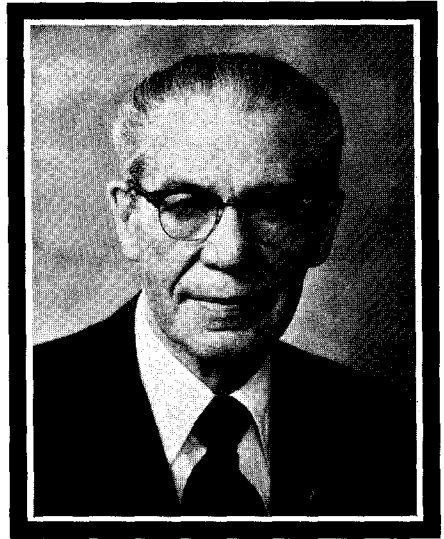
# タナー副管長 逝去さる

ス ペンサー・W・キンボール大管長の第一副管長であったN・エルドン・タナー副管長は、去る11月27日にソルトレーク・シティの自宅で息を引き取った。

医師の診断によれば、死因は心臓疾患(心不全)とのことである。タナー副管長は、ここ数年来神経系統の慢性疾患に冒され、病気がちで、徐々に視覚と言語に障害をきたしていた。しかしながら、教会の責任は十分に果たし、死の前日まで、事務所で働いておられたほどである。

故タナー副管長は、1960年10月に十二使徒定員会補助に召され、その2年後に十二使徒定員会会員として支持され、さらに1963年以來、4人の大管長の副管長を務めてきた。まずデビッド・O・マッケイ大管長の第二副管長として、次にジョセフ・フィールディング・スミス大管長の第二副管長、さらにはハロルド・B・リー大管長の第一副管長、スペンサー・W・キンボール大管長の第一副管長を務めた。

キンボール大管長は、第一副管長であるタナー長老について、かつてこう語った。「子供のように親しみやすく、父親のように賢明で、優しい兄のように私を愛してくれる人です。実に稀有な人となり(人格)の持ち主です。父親として、友人、兄弟、実業家として、市民、あるいは社会の指導者として、主イエス・キリストの使徒として



自認しているいかなる義務も、彼は避けたことがありません。」

葬儀は11月30日、キンボール大管長の管理の下に、テンプルスクエアのタバナクルにおいて執り行なわれ、数千の弔問者に向けて、キンボール大管長の弔詞が大管長の秘書であるD・アーサー・ハイコック兄弟により代読された。司会は、ゴードン・B・ヒンクレイ副管長が行なった。また、エズラ・タフト・ベンソン十二使徒定員会会長、十二使徒定員会のマービン・J・アシュトン長老、ビクター・L・ブラウン管理監督、そして地域社会における指導者のB・Z・キャツラー・ジュニア氏が、タナー長老の主や家族、地域社会に対する献身について称賛の辞を送った。加えて、大管長会第二副管長のマリオン・G・ロムニー副管長が告別の祈りを捧げ、七十人第一定員会会長のフランクリン・D・リチャーズ長老が閉会の祈りを捧げた。音楽はモルモンタバナクル聖歌隊。また、ソルトレーク・シティ共同墓地に設けられたタナー長老の墓は、十二

使徒定員会会員のニール・A・マックスウェル長老により奉獻された。

今は亡き第一副管長への弔詞の中で、キンボール大管長は、タナー副管長の死は遺族にとってもまた教会やこの世界全体にとっても、深甚な損失であると語った。「私自身にお召しが来るまで、タナー副管長が私の傍らに立っていてくださるようにと、どんなに祈ったことでしょうか。私の心は彼を呼び求め、彼のために泣き叫んでいます。どんなに彼を愛していたことでしょうか。これからの日々が、どんなに寂しいことでしょうか。」

さらに、キンボール大管長はこう語った。「人の真の偉大さは、どのようにして測ることができるのでしょうか。万人が知る業績によってのみでしょうか。それとも、ほんの数人の人と神様しか知ることのない、人の口の端に上ることもない、深い思いから生まれた愛の行ないをも勘定に入れるべきでしょうか。ほとんど最後の一息までも、タナー副管長は他の人のためを思っておられたのです。」

キンボール大管長は、タナー副管長がその死のわずか数時間前にキンボール大管長夫妻に電話をかけ、夫妻の健康を気づかったことを話した。

十二使徒定員会のエズラ・タフト・ベンソン会長はこう述べている。「タナー副管長は、この時代における最も偉大で気高い人の中に数えられます。彼は私たちすべての者に、謙遜で柔和な者が偉大な業績を残す例を示して下さいました。タナー副管長は、並々ならぬ能力と、人並外れた謙虚な心を兼ね備えた方でした。献身的に働くことに絶えず心を傾け、人の賛辞を受けることには心を碎こうとしませんでした。」

ベンソン会長は、さらに続けてこう語った。「タナー副管長の素晴らしい業績に目を

向ける時、忘れてはならないことがひとつあります。それは、変化や発展はすべて個人の成長のためにあるという事実を、彼が決して見失わなかったということです。」

アシュトン長老は、「不変の原則」の中に生きた人として、タナー副管長をこう評した。「4人の大管長に仕えた期間は、停滞の時期、不景気と繁栄の時期、また全世界的経済不安や家庭問題の多発する時代でした。しかし、彼はどのような時も恒常心にあふれた人でした。」

彼は、あらゆる状況の下にあって、常に正しい方向に進む努力をする方法をわきまえた人でした。また、困難な抗争をも決して避けず、重大な決断を先に延ばすようなことはしませんでした。彼は、常に真理と正義に心を向けていたのです。」

アシュトン長老は続けた。「タナー副管長は、最後まで忠実に耐え忍べるようにと、常に祈っておられました。その両眼が視力を失っても、素晴らしい精神力と穏やかな霊性は、損なわれることはありませんでした。その精神は研ぎすまされて鋭く、最期まで鋭敏でした。」

アシュトン長老はまた、聴衆にタナー副管長のユーモアのセンスを思い起こさせてくれた。「タナー副管長は、すかさずきっぱりと機転のきいた冗談を言いました。」

タナー副管長の従兄弟であるブラウン管理監督は、カナダのアルバータ州に住むタナー、ブラウン両家のことについて話した。

「私は、家族みんなで過ごした楽しい思い出に心を馳せています。私の父とタナー副管長とは、特別な関係で結ばれていました。ふたりは、伯父、甥というよりは兄弟のようでした。そう、まるで双子の兄弟でした。どちらか一方がスーツとか靴とかネクタイなど、相手の好みのものを持っていると、すぐ交換してしまうのです。」

ブラウン管理監督は、タナー副管長の好んだ格言を引用した。タナー副管長の人生観を彷彿させるものである。

「私は問題を起こす一分子となるよりも、解決する一分子となる方がはるかに好きだ。」

「だれが正しいかは大した問題ではない。何が正しいかが大切なのだ。」

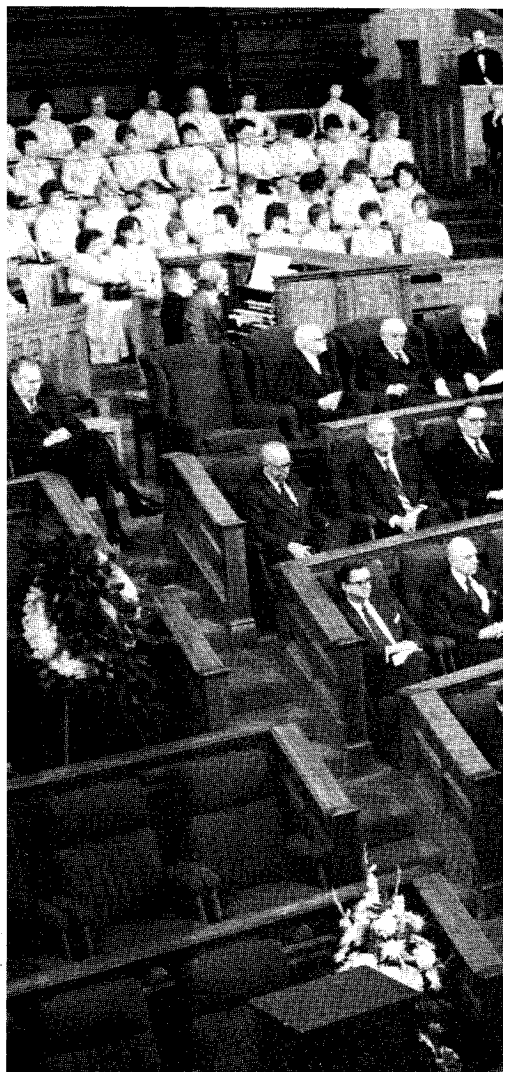
「人間が名声を得ることにこれ程汲々としなければ、世界はもっと住みやすくなっていたことだろう。」

ヒンクレー副管長は、タナー副管長がどれ程懸命に病氣と闘ってきたか知る人はほとんどいないことを話された。「まず視力がひどく衰えました。もはやものを読むことができなくなった時、彼はひどく落胆しました。そして、また数カ月たつうちに、発音に困難をきたすようになり、それが徐々にひどくなりました。次に体力が衰え、歩行が困難になりました。しかし彼は車椅子を使うことを頑強に拒み、自らの脚で立つことをやめませんでした。彼は最後の最後まで、自主独立と堅忍不拔の精神を持ち続けた人でした。」

ヒンクレー副管長は続けた。「タナー副管長の肉体の虚弱さ、体力の衰えばかりを強調してきましたが、心は依然として鋭敏、明晰でした。その思慮分別は損なわれず、判断力も衰えませんでした。そして、国民の祭日である11月25日の感謝祭の日まで、毎日大管長会集会に出席しておられました。最後の最後まで、彼は実に多岐にわたる教会の様々な問題、はるか先にしか影響が及ばない事柄に関してまで、断固とした調子で賢明な意見を述べておられました。84歳の老人が知的な鋭敏さと推理能力を持ち、過去の経験を思い起こして、現在の問題に当てはめて考えることができるとは、まったく驚異的なことではないでしょうか。」

ヒンクレー副管長は、教会こそタナー副

管長の生活の基であり、生活構造そのものだったと語った。「そのほかのものは皆、二義的なものでした。エルドン・タナーは、主により召された神聖な責任と自分自身との間に何ものをも差しはさみませんでした。彼は、その生活の中で主を第一に置いていました。彼は、成功の秘訣について質問を受けると、主の言葉を用いてこう答えたものでした。『まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべ



て添えて与えられるであろう。』（マタイ 6：33）

タナー副管長の生涯は、人を働かさずにはおかない、かの偉大な原則の実行の模範でした。」

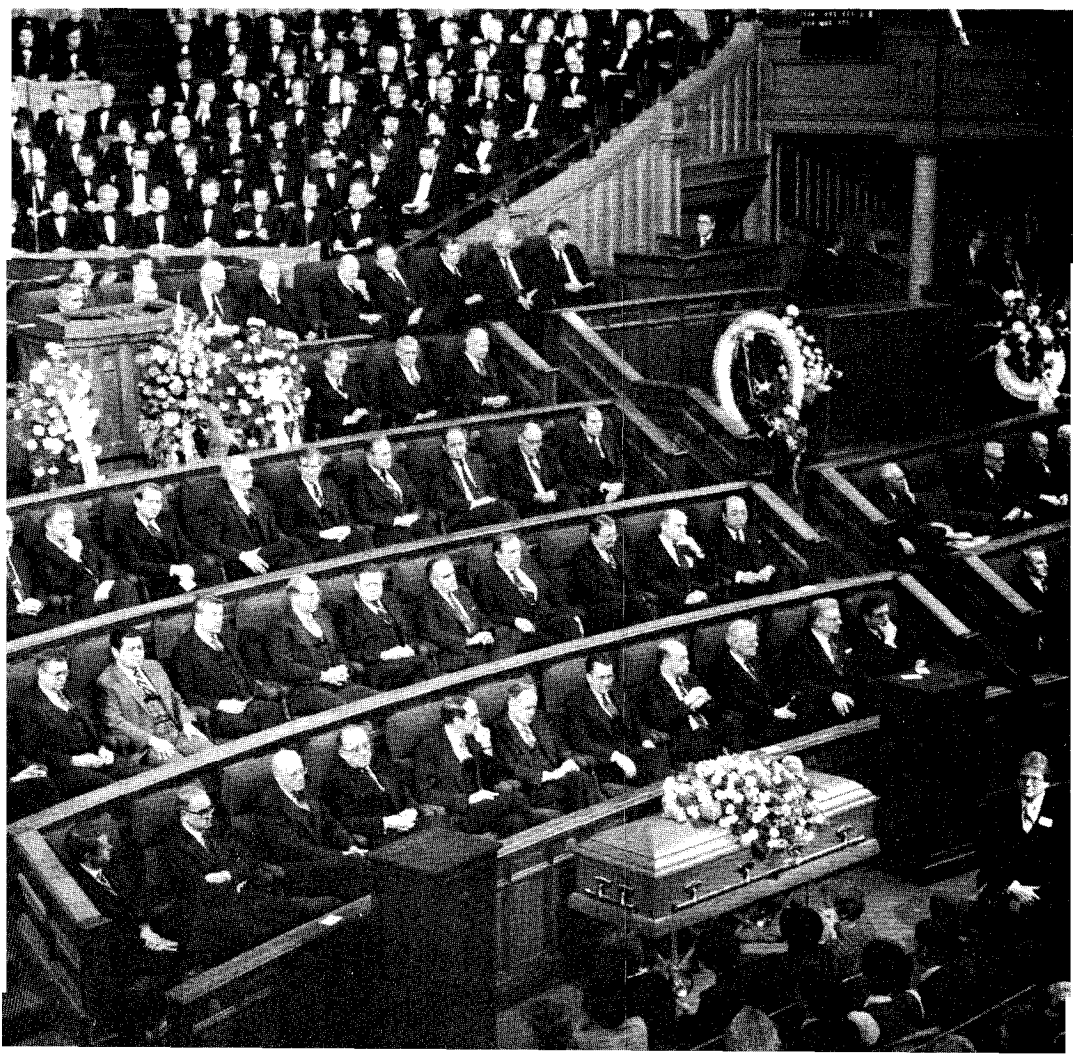
葬儀の席上で述べられた弔詞の外にも、実業界、地域社会、州、合衆国政府の高い役職にある人々、他の教会の指導者たちから次々と弔問の手紙や電話が寄せられた。

また、タナー姉妹と遺族には、ロナルド・

レーガン大統領夫妻から弔問のメッセージが届けられた。

タナー副管長は、カナダ、アルバータ州カードストーン第一ワード部の監督、エドモントン支部の支部長、そしてカルガリーステーキ部のステーキ部長を7年務めた後、教会に全時間を捧げる役職に召された。

1961年から1963年まではイングランドに本部を置く西ヨーロッパ伝道部の伝道部長として働き、ソルトレーク・シティーに戻





ってからは教会の系図協会の長としてその任を果たした。そしてその後、大管長会に召集された。

タナー副管長のソルトレーク・シティーにおける地域社会への貢献は、並外れたものである。展覧会場、展示場、コンサートホール、美術館、ショッピング・センター、様々な事務所、教会本部、それに数々のオフィス・ビルディング、ホテル・ユタ、歴史的な建造物であるビーハイブハウス、プロミストバレー劇場の修復などを奨励、促進した。

また、タナー副管長は様々な企業の理事を務めると同時に、プリガム・ヤング大学および教会教育部の理事としても働いた。彼の管理能力は、教会関係のみならず地域社会の組織にまで、幾度も活用された。

彼の高潔な人格とその業績は、ソルトレーク一帯の商工会議所にも認められ、「わが市の巨人」と称せられたほどである。彼は、「素晴らしい人格者、深い霊性を持つ大実業家、世界中の何百万という人々から重んじられた偉大な指導者」として称えられた。

1981年、ユタ大学ではタナー副管長を称えて、実業部門に百万ドルの奨学金を設け、未来の実業界の指導者育成をはかることとした。もちろん、未来の実業界の指導者は、ビジョン、信用、決断力、自尊心、高い理想を持ち、タナー副管長のように、よりよい地域社会、よりよい世界建設のために己を捨てて貢献する人でなければならない。また、ユタ大学では、そのような顕著な業績のあった者に賞を贈ることとした。

1980年、プリガム・ヤング大学ではタナー副管長に国際経営者賞を贈り、その栄誉を称えて、経営学部と経営学大学院を容する新たな建物をタナー・ビルディングと命名した。

ナサン・エルドン・タナーは、1898年5

月9日、ナサン・ウィリアム・タナーとサラ・エドナ・ブラウン・タナーの8人の子供の頭として、ソルトレーク・シティーで生まれた。生粋のユタ人であったタナー一家は、幌馬車でカナダへ行き、アルバータ州カードストンの北7マイルほどの小さな植民部落に居を定めた。彼の母親は、最初の出産の折、祖母と共にソルトレーク・シティーに戻った。

そして、その最初の息子が成長して、教育界、政界、実業界において傑出した人物となり、一地区の教会活動においてもその手腕を発揮し、その後、教会幹部として全時間をその責任に捧げるようになり、教会のために全世界的な責任を果たすこととなったのである。

彼の職歴は、3つしか教室のない学校の校長兼教師に始まる。その後、彼はアルバータ州の州議会議員に選出され、議長を務めた。また、州の土地・鉱山局の局長に指名され、その数年後には森林局の局長の責任も加わった。16年間、州政府の機関で働き、その後はカナダの石油、天然ガス関係の指導者となり、1954年にはトランス・カナダ・パイプライン株式会社の社長に推されて受諾、3億5千万ドルの巨費を投じて、3,200キロにわたるカナダ横断石油パイプライン建設の指揮をとった。

タナー副管長は後年、その生涯を非常に簡単につづっている。「私は16年間教師として働き、その後16年間行政府の役人として働き、8年の間非常に競争の激しいふたつの業種、すなわち石油関係の仕事と、パイプラインの敷設と運営という仕事に携わった。」

タナー副管長の生前、ある人が彼をほめ称えてこう言ったことがある。「エルドン・タナーのような人が40人いたら、世界の問題は半減するでしょう。」

彼の正直で高潔な人格がニューヨーク市でのある裁判の折に取り上げられたことがある。次のような問いが持ち出された。「だれか、完全に正直な人の名をあげることのできる者がいるだろうか。」そしてその時、カナダ西部のナサン・エルドン・タナーこそ、その人であるとして、彼の名が法廷記録に載ったのである。

タナー副管長は、1919年にサラ・イザベル・メリルと結婚し、5人の娘をもうけた。

そして死の直前には、自分の家族と24人の孫、50人のひ孫、それに3人の姉妹と弟に囲まれて生活していた。

N・エルドン・タナー第一副管長の死去に伴い、第二副管長であったマリオン・G・ロムニー長老が第一副管長に、副管長であったゴードン・B・ヒンクレー長老が第二副管長に召された。

## タナー副管長逝去に関する 大管長会声明

大管長会のスペンサー・W・キンボール大管長、マリオン・G・ロムニー第二副管長、ゴードン・B・ヒンクレー副管長は、N・エルドン・タナー副管長の逝去に際し次の声明を發表しました。

「N・エルドン・タナー長老が亡くなり教会全体は大きな損失を感じています。タナー長老はこれまでに4人の大管長の副管長として働きました。そして長年にわたり身を粉にして管理の職を果たしてきました。その知恵と靈感は、神が定められた伝道の業を推し進めるにあたり、測り知れない恩恵をもたらしました。

教会の重要な職にあたった人々の中で、タナー長老ほど強い信念を持った人は他にありませんでした。また義務を遂行する時も、だれよりも忠実でした。

永遠の父なる神とよみがえられた主イエス・キリストに対するタナー長老の揺るぎない証は、世界中の何百万という人々の支えとなってきました。

また私たちが育んできた親しい交友関係は温かく美しいものでした。彼を失って、これからどれほど寂しい思いをすのでしょう。

さらにタナー長老は、この地域や州の人々はもちろん、合衆国全体やカナダの人人の力になってきました。仕事における彼の洞察力は、その誠実さと同様世界的に認められていました。またその人柄を物語るものでした。

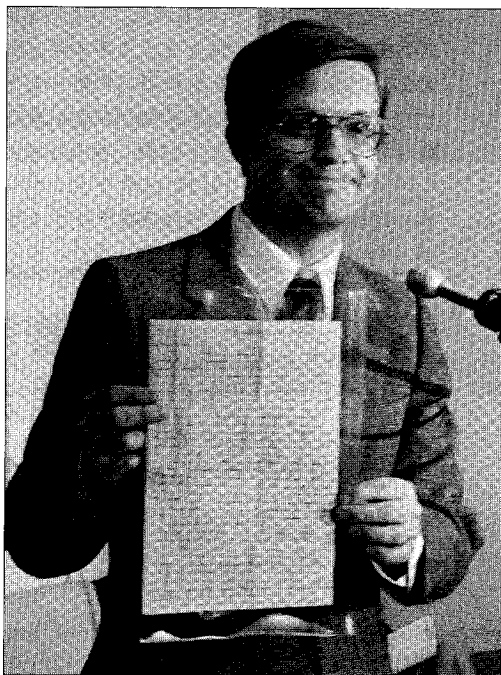
私たちはタナー長老の死に哀悼の意を表すると共に、残された奥様や御子様たちにも思いを馳せています。天父からの平安が彼らの上であり、慰めと励ましを受けられますように。」

# 収集家による 貴重な発見 予言者ジョセフの 母親の手紙

**ユ** タ州プロボで、教会歴史に関連する最も古い日付の文書を手に入れた人がいる。

この人は、歴史文書の収集を趣味とする弁護士プレント・F・アシュワース兄弟で、ジョセフ・スミスの母ルーシー・マック・スミスが義理の姉妹にあてた1829年1月23日付けの手紙を、別の収集家から譲り受けた。

手紙には、ジョセフ・スミスがすでに翻訳を開始していた古代の記録について詳しく記されている。1828年の夏、マーテン・ハリスは、翻訳ずみの原稿116ページを紛失した。彼は翻訳の業に携わる予言者を援助していて、懐疑的な妻と他の特定の人に原稿を見せる許可を受けたのである。116ページの原稿が実際にどうなったのかは現在知られていないが、マーテン・ハリスの妻が仕組んで盗ませたのではないかと推測されている。原稿を紛失したために、啓示のみたまはジョセフ・スミスから取り上げられ、モルモン経として出版される部分の翻訳が許されたのは、1828—29年の冬のことであった。その後、翻訳の業はジョセフの妻エマの助けによって断続的に行なわれたが、1829年の4月に、オリヴァ・カウド



▲1829年1月にルーシー・マック・スミスが書いた手紙を見せるプレント・F・アシュワース兄弟。この手紙は、モルモン経の翻訳や初期の教会歴史について新たな事実を明らかにした。

リがジョセフの言葉を口述筆記するようになってから、急速に進展した。

アシュワース兄弟が入手したルーシー・マック・スミスの手紙は、予言者ジョセフとオリヴァ・カウドリと一緒に翻訳を始めると3カ月前に書かれたものである。手紙の宛名は「バーモント州ロイヤルトン、メアリー・ピアース様」で、「ニューヨーク州バルマイラ」の消印が押されている。おもし

ろいことに、手紙が現在残っているのは、この消印のお陰であった。この手紙は封筒や文書の古い消印を収集している人の手に渡っていたからである。ルーシー・マック・スミスの手紙は、最後のページの裏に消印が押されていたので、無傷のまま保管されていたのである。(当時の手紙は封筒に入れる必要はなく、便箋を折って封をし、そのまま裏に宛名を書いた)

最初の収集家は手紙の内容の重要性にまったく気づかなかった。しかし、2番目の収集家は見逃さなかった。彼はその手紙を買取ると、21年にわたり、歴史文書を集めているアシュワース兄弟に連絡を取った。アシュワース兄弟はこう語っている。「最初に手紙を読んだ時、興奮のあまり、あやうく椅子から落ちそうになりました。」手紙は彼のコレクションに加えられるが、その写しは教会で利用できることになった。

教会歴史の優れた著述家であり、筆跡鑑定の権威でもあるディーン・ジェシー兄弟は、手紙を綿密に調べた結果、ルーシー・マック・スミスの筆跡に間違いないと断言した。

ジェシー兄弟は、次のふたつの理由から、この手紙は教会と教会歴史家にとって重要な意味を持つと述べている。

1. 教会が組織される以前の最も古い書簡であり、最も古い日付を持つ文書である。
2. ジョセフ・スミスの最初の翻訳(失われた116ページ)について記された手紙が、始めて歴史家や学者の前に現われた。

手紙の中でスミス姉妹は、息子が古代の

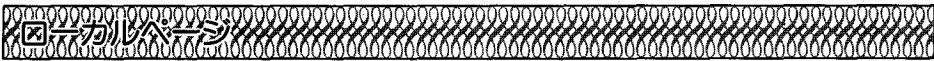
記録の翻訳に携わっていることや、その記録がニューヨーク州バルマイラの真南にあるクモラの丘という所で発見されたことを告げている。また「不注意により」失われた116ページの原稿にも触れて、その内容を要約している。スミス姉妹は自分で原稿を読むか、あるいは息子の口から直接聞いてそれらの知識を得たのであろう。

手紙の内容は今日のモルモン経の第1章とほとんど同じものであるが、リーハイとイシメルについてこれまで知られていなかった情報も記されている。

「ここで、昔インディアンの先祖によって地中に埋められた記録について少しお話したいと思います。この人々はリーハイという名の主の予言者の子孫です。リーハイは、ネブカデネザルがエルサレムを包囲して全滅させる数日前に、自分の家族と妻の兄弟〔イシメル〕の家族を連れて町を脱出しました。リーハイは主のみ名によってユダヤ人に、罪を悔い改めるように警告しましたが、彼らはそれに耳をかきなかったばかりか、十字架につけられるキリストについて夢の中でリーハイに示された示現を信じようとしませんでした。そこで神はリーハイの民に、エルサレムを脱出して荒野に逃れるようにお命じになったのです。」

スミス姉妹の手紙はさらに続いて、ふたつの家族がアメリカ大陸に渡り、そこでニーフアイに従う民とレーマンに従う民に分かれたことを説明している。そしてニーフアイ人について次のように記している。

「技術的に未熟な民ではなく、科学と芸術に関する知識に長けていました。ところが、



民の間にエルサレムとユダヤ人の国全体を滅亡へと追いやったあの秘密結社と同じものがあつたので、多くの年月の後に……その兄弟であるレーマン人よりも邪悪な民になりました。神はニーファイ人が罪悪を悔い改めようとしなないのでご覧になり、滅亡をもって報復されたのです。」

それからスミス姉妹は義理の姉妹に対し特別な証を述べている。「忘れてはなりません。神御自身が数々の示現の中で、翻訳する力とこれらのことを回復する力をジョセフにお授けになりました。ですから、嘲笑ちやうに加わったりしないように気をつけなさい。」

ディーン・ジェシー兄弟は、スミス家族が無教養であったと言って教会を誹謗する人々に対し、この手紙は彼らの主張を打ち砕くものになると思っている。「この手紙はルーシー・マック・スミスが、153年たつ

た今でも容易に読めるほど、見事な筆跡の持ち主であったことを示しているだけでなく、スミス家の人々が高い教養を備えていたことを表わしています。……また手紙の書き方は申し分ありませんし、作文や文法の面から見ても、予言者の母親が教養のある洗練された女性であったことが分かります。」

さらにジェシー兄弟の話によれば、この手紙は数年後に書かれたルーシー・マック・スミスの伝記とジョセフ・スミスの伝記に見られるスミス家の記録が正しいことを立証している。「ルーシー・マック・スミスの手紙は、1830年代から40年代に記されたスミス家の伝記について、その内容が正しいことを裏打ちする同時代の証拠です。また家族の活動に関する記述から、これまでではっきりしなかった教会歴史上の出来事の正確な日付が、幾つか明らかになりました。」

## 名古屋テレビ主催 交通遺児チャリティーに協賛

(名古屋西ステークス部)  
(名古屋ステークス部)

—広報活動の一環として成果—



▲名古屋テレビ主催「ホリデースペシャル」

11 月3日に行なわれた名古屋テレビ主催「ホリデースペシャル」の交通遺児救済チャリティーバザーに、名古屋西

ステークス部と名古屋ステークス部が教会を代表して協賛し、当教会に名古屋テレビ(名



▲みたらしだんご・おでんコーナー

古屋放送株式会社から感謝状が贈られた。

名古屋テレビは交通遺児救済募金運動を始めて6年になるが、当教会は昭和55年度の交通遺児チャリティーから協賛し、今回で3回目。

きっかけは名古屋西ステキ部長であり、地域広報部長である中村武史兄弟が仕事の関係で名古屋テレビに出入りしていた時、交通遺児救済募金運動の協力店(テナント)を募集していることを知ったのが始まり。その趣旨に賛同するのみならず、教会の名前を前面に出して活動できることから広報活動の一環としても検討され、名古屋西ステキ部副ステキ部長であり、現在名古屋地区広報部長である大橋稔郎兄弟が中心となり準備が進められた。

今回は、名古屋西ステキ部の広報部長の亀井秀一兄弟が実行委員長になり実施された。

名古屋テレビ側からの要望もあり、好評の手作り菓子や袋物のチャリティーバザーに加え、みたらしだんご・おでんコーナー、

▲手作りのお菓子や袋物などが並んだチャリティーバザーに多くの人が足をとめた。

ゲームコーナー(ストレス解消ゲーム・吹き矢ゲーム)などバラエティーに富んだものとなった。総売り上げは19万円ほどになり、必要経費を差し引いた約9万6千円を名古屋テレビに、交通遺児救済募金として献じた。

3回目の協賛とあって、テレビ出演者のタレントと顔なじみになったり、他の協賛のテナントの人々と親しくなったりと対外的に教会の名前を知らせるよい機会となった。売り子として活躍した人々に新しい会員が多かったこともあって、教会が放送局とのタイアップによって社会的に活動ができることを知り、感激も大きかった。若い教会員の中でこれまであまり活気のなかった人たちが、今回の奉仕活動を通じて喜びと証を得たのはなによりの成果であった。

「毎年11月3日のチャリティーバザーに協賛していく意向ですが、さらにこのような対外活動を通じて、広く一般の人々に教会を紹介していきたい」と大橋稔郎兄弟は抱負を語っている。

## 関東地区9ステーク部合同 「セミナリーグランプリ'82」 開催される



青少年160名が参加した関東地区セミナリー大会「セミナリーグランプリ'82」。  
大聖句探し大会で、まず10名が選抜され順位を競った。

11 月23日(火)の祭日、関東地区セミナリー大会が東京ステーク部センターで開催されました。この大会は、青少年のために昨年から始められ、今後毎年11月23日に催されることとなります。今年は9ステーク部合同、静岡ステーク部から高崎ステーク部までの青少年160名、役員教師60名の出席がありました。82年度のセミナリーは「教義と聖約／教会歴史」のコースを学習しているため、「恐れず来たれ聖徒」が大会のテーマとなりました。

午前10時に開会。鈴木正三地域教育部長からのメッセージがあり、アトラクションでは教師や生徒による琴演奏、腹話術、手車隊の演劇を楽しみました。その後、教育部職員を中心とする6人の講師による特別

セミナリーが持たれ、生徒は自分の好きなテーマのクラスに参加しました。また、昼休みには、演劇や展示作品の観賞、ポップダンスを楽しみました。そしていよいよ待望の大聖句探し大会。出題は「教義と聖約」から行なわれました。1秒、いやそれ以下を競う緊張感。出題ごとに歓声が上がります。選抜された10名がランキングマシンのボタンを手にし、順位を判定した結果、第1位の白皮紙末日聖典合本を獲得したのは、東京西ステーク部甲府ワード部の標康<sup>マサ</sup>司兄弟。第2位は、東京東ステーク部鎌ヶ谷支部の桑原淳生兄弟、第3位は静岡ステーク部富士ワード部の長谷川千春姉妹でした。

最後に証会。最近まで教会から遠ざかっ

ていたが、この大会に出て多くの仲間が努力しているのを見、自分も再び頑張りたいと決意した人。また学校の勉強を14時間しているが、自分の学習計画には必ずセミナーを組み込んで福音学習を大切にしていると証する人など、青少年の兄弟姉妹のたのもしい証が聞かれました。

青少年の素晴らしい才能と力、そして燃えるような証に感動した一日でした。来年はもっと多くの兄弟姉妹と集まろうと声をかけ合う若人の姿

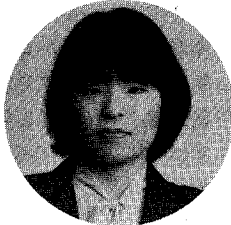


を見ると、この大会に主の導きと祝福があったことがわかり、感謝の念で一杯になります。

セミナーが青少年にとって実に強力なプログラムであることを実感させられた大会でした。(レポーター：教会教育部指導主事・西原雄二)

▲劇「手車隊の旅」。東京西ステークス立川支部の教師が中心となり熱演した。

福音を生活の中に取り入れる



元岡山地区福音教師  
高松アデーレ部岡山ロード部  
橋本 康子

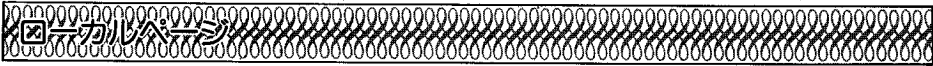
●私は毎朝6時に起きて、セミナーの学習を45分間するようになり、試験の朝でも決して休みませんでした。

「人は真理を変えることはできないが、真理は人を変える」と言います。私は、自分の経験から福音は私たちの生活を変えて私たちを幸福にしてくれることを証します。

私は、今から8年前、中学校3年生の時

に英会話を通して教会を知りバプテスマを受けました。幼い頃から宗教に対して大変興味を持っていましたので、バプテスマを受けるまでに、さまざまな教会に出席し、また人生の目的や死後の世界などについてよく考え、それらをしきりに知りたいと思





っていました。そんな矢先でしたから、この末日聖徒イエス・キリスト教会の教えは、新鮮な感覚と共に私の生活の中に飛び込んできました。ほとんど抵抗なく受け入れた私は、それから熱心に教会に集うようになりましたが、それが今度は度を越して教会に入りびたりとなり、帰宅するのも遅くなりました。初めは何も言わなかった両親も次第に教会に行くのを反対するようになりました。それから学業もおろそかになり、家の手伝いもせず、その上両親に対して口答えをするまでになっていきました。

その理由から、両親は、私を教会に行かせないようにとあらゆる手段を講じました。家庭内の緊張感が高まり、私はつらくて毎晩布団の中で泣きました。そんな様子を横から見ていた妹は、「お姉さん、いい加減に教会に行くのをやめたら？」と私に勧めるほどでした。事は、段々と悪化して私は日曜日の聖餐式だけにしか出席することができなくなりました。それでも毎週欠かさず教会に行きましたので、私は、「神様のことをこんなに一生懸命行っているのに、なぜ私は家族から迫害を受けるのだろう」と真剣に悩みました。

そんなある日、私はふとしたことから父と口げんかをしました。今まで一度も怒鳴ったことのない父が初めて怒鳴ったのです。私は、「もう学校へなんか行かないから」と言って自分でも最悪の状態になったことを感じました。

それから両親は、私の家の近所に住んでいたひとりの教会員と私を教えたふたりの姉妹宣教師を家に呼んで、彼らに向かって

「うちの娘はお宅の教会へ行くようになって悪い子になりました。教会では一体何を教えているのですか」と詰問しました。その時の私は、両親に対して口もききたくないと思ったものです。

そんなことがいつの間にか支部長さんの耳に入り、ある日曜日に彼は私を呼んでこう言われました。「橋本姉妹、親の信頼を得ようと思ったら、聖書の中でヤコブが言っているように信仰に行かないが伴うことが必要です。(ヤコブ2：17) そのためには、まず学生の本分である勉強を一生懸命すること、そして家族の一員として家の手伝いをすることです。そうすればあなたの御両親は、喜んであなたを教会へ行かせてくれるでしょう」と。そう言われて、私は初めて目が覚めたような気がしました。そして、今まで自分がとってきた愚かな言動を深く反省し、すでに壊れた両親との信頼関係を取り戻す決心をしました。それが高校1年生の春頃のことです。

それから私は、今までしたことのないほど熱心に勉強するようになりました。ひとつの試験が終わったその日から次の試験の勉強をし、分からないことがあれば職員室まで行ってしつこく先生に質問しました。その結果、毎回の試験で少しずつ成績が上がり、入学した時には中の上の順位から2年生の初めには首位に立つようになりました。また、両親に対しても口答えをしないように腹が立った時には心の中で10ほど数を数えてから言うようにしたりとか、いろいろとやってみました。今まで身についた性格を直すのはなかなか難しかったので

すが、これも少しずつ改善されていきました。これらを実行する上で役に立ったのがセミナーでした。セミナーの中には、早起きをすること、計画性のある生活をすること、イエス・キリストのような愛を人人に示すことへのチャレンジがありました。始めはあまり好きではなかったセミナーも、ほかの兄弟姉妹と一緒に勉強することによって段々と好きになりました。それから、私は毎朝6時に起きて、セミナーの学習を45分間するように、試験の朝でも決して休みませんでした。

祈りを通して主を信頼することによって私の信仰は次第に強くなっていきました。このように少しずつ私の生活が変わっていくのを見て両親は、ある時私を部屋へ呼びました。「今まで教会に対していろいろ反対していたけれども、これからは一切反対しないからお前の好きなようにやりなさい。そして、教会のためなら何でも協力するよ」と言ってくれたのです。私はそれを聞いて、飛び上がるほど喜びました。そして、その約束の通り私が教会へ行くためによく助けてくれるようになりました。日曜日に寝坊をしていると、「日曜学校に遅れるから早く起きなさい」と言ってくれるほどでした。

私は、このように両親の態度が180度変わったことにとっても驚きましたが、それ以上に自分が変わったことに驚きました。そして、高校を卒業する頃から私は、これらの自分の経験を生かして福音によって幸福になれることを多くの人々に伝えるために伝道に出たいと思うようになりました。また、個人学習の「福音を分かち合う」とい

うコースを学んで、その気持ちは具体的なものとなり、ついに1981年4月に宣教師として日本岡山伝道部へ召されました。

現在、帰還して3週間になりますが、私の8年間の信仰生活を振り返って、確かに福音を生活に取り入れることによって生活が変わり幸福になれる道が備えられることを証することができます。モルモン経の中でベンジャミン王は次のように言っています。「それはわれらの心を非常に改めさせ、悪を行う性質をなくして常に善を行なう望みを与えたもうた全能の主の『みたま』に由るのである」(モーサヤ5:2)と。私は、バプテスマを受けた時に変わったのではありません。心から悔い改め、全能の主のみたまを受けた時に初めて変わったのだと思います。

私は、未熟な自分を今まで忍耐強く育ててくれた両親に心から感謝しています。そして、セミナーの先生や多くの教会の兄弟姉妹に感謝しています。また、何よりも回復されたこの福音に感謝しています。

いつの日か私の両親と妹が、この福音に真剣に耳を傾けるようになるまで、私は変わり続けなければならないと思っています。(はしもと・やすこ 1959年生まれ)



## 「われは汝らを 世の塩のごとき者とす」



日本銀行勤務  
静岡ステキ部静岡ワード部

鈴木 茂

**も** う20年以上も前のことになりますが、私は日本における数少ない家族会員の一員として、8歳の誕生日にバプテスマを受け、12歳でアロン神権を授かり、神権者としての第一歩を踏み出しました。

執事として新たな気持ちで教会に集い始めた時、当時の支部長から言われた次のような言葉を今でもはっきりと覚えています。「鈴木兄弟、兄弟はもしかしたら日本人の中で12歳で神権を授けられた最初のグループに属し、日本中の12歳の男の子の中でたったひとりきりの神権者かも知れません。これをよく覚えておきなさい。それだけ教会は今の日本では小さな小さな存在なのです。兄弟はこれからどこにいても『ここに末日聖徒あり』と言われるように努力して下さい。そうすることが教会の発展にもつながるのです。」

今から思えば、この言葉が私のその後の

職業観を決定づけたようです。ただその意味を素直に理解できるようになるまでには随分時間がかかり、回り道もしました。若さゆえに色々な出来事に悩み、苦しんだこともありました。それはささやかな、しかし私にとっては確かな信仰遍歴でもありました。

現在、私は日本銀行に勤務しています。昨春、本店から静岡に転勤となり、地域の金融動向調査や金融機関の経営指導という任に着いています。しかし12歳当時の私が希望していた職業はこれとはかなり違うものでした。支部長の言葉に促された私は「世の中のためになり、しかもできるだけ華々しい職業」に就こうと子供心に考え始め、父が警察官だった影響も手伝って、検事が弁護士が最適と思っていました。そしてそのための人生プランを自分なりに作ってみたりもしました。

ところが、希望大学に入るという最初の段階からつまづいてしまい、こんなはずでは、と焦る内に教会からも足が遠のき始めました。惨めな挫折感を味わいながらも「何としても出世するんだ」という気持ちのみが増幅し、伝道の計画など頭の中から消え去ってしまいました。

ところが、大学4年となり就職活動が最盛期を迎えようとするころ、「何かが違う」という心の奥からのこみ上げるものを感じ、電車の中で人目をはばからずボロボロと涙をこぼすという経験をしました。監督会や兄弟姉妹の助力で私は教会に戻ることができました。人生の岐路に立つ時に主に祈る特権を持つという素晴らしさに心はうち震

え、張りつめていた気持ちが安らぐのを感じました。私は主の答えとして、それまで思ってもみなかった現在の仕事を選んでいました。

入行してからもしばらくの間、正直な所、主の真意を図り兼ねるような状態が続きました。私に与えられた仕事は、地域経済の実態調査、金融機関の立ち入り調査などで、ハードではありますが面白くもあり、それなりの充実感を味わっていました。教会の責任を果たすために、幾晩も徹夜して仕事をかたづけするようなこともありました。ただ具体的に世の中の役に立っているという充足感には乏しく、私にとってはそれが大きな不満の種でした。

そんなある日、私は仕事でひとつのミスを犯し、直属の上司にその処理について相談しました。彼は「取り繕うことも十分可能だ。責任者に報告すべきかどうかは君の判断に任せる」と言いました。私は決心し、報告に出向きました。結果は満足すべきものでした。そのいきさつを上司に話した所、「サラリーマンとしては、報告せずにすますことも、あり得るだろう。しかし君をクリスチャンとしては信用しなくなっていただろう。君のような部下を持って私はうれしいと思っている」と言ってくれたのです。

また、ある時、長い間海外勤務をしてこられた幹部の方とこんな会話をしました。「アメリカでは確かにモルモンの方の活躍が目覚ましく、何人も個人的に尊敬している人がいましたが、この日本で、しかもこの日銀の中でもモルモンが育ち始めているのですか。」私は、子供の頃はわずかであっ

た教会員も、今では日本中で、いろんな分野で多くの人が活躍するようになったことをお話しました。僭越であったと思いますが、今日の教会の成長を主に感謝してやまない思いが、胸に突き上げてくる、とても心楽しい会話でした。

「われは汝らを世の塩のごとき者とす(る)」(Ⅲニ一ファイ12:13) 12歳の私に支部長が語ってくれたのはまさにこのことでした。人々は末日聖徒を実によく観察しています。それに応えるには職場でもどこでも「地の塩」となるように心がけるべきだということです。それは以下の3つに要約できるでしょう。(1) 日々の生活の中で福音を実践することこそ、人々に主の存在を気づかせる最良の方法である。(2) 仕事も信仰も日々の地道な積み重ねによって大事をなし得る。(3) 仕事においてもどんな場面でも、最終的には人間性、人格が重要視される。

仕事を通して得る社会的信用を大切にしながらも、自分に与えられた持ち分と可能性を、信仰生活を含めたあらゆる面で最大限に追求していくことを座右の銘として、これからも頑張っていくつもりです。(すずき・しげる 1949年生まれ、静岡ワード部第一副監督)



# 私を改宗させたもの

## —福音がもたらした 家庭の幸福—



釧路地方部帯広支部

石川 康弘

**私**は結婚するまで一度も幸福だと感じたことはありませんでした。その理由として、家族全員で楽しく食卓を囲んだり、また余暇を利用して楽しい一日を過ごしたりという記憶がまったくなかったからです。ですから結婚して幸福になろうという気持ちを人一倍強く持っていました。

結婚した時は、これで幸福な家庭が築けると思いました。しかし、それは簡単に崩れ去りました。結婚3カ月目で私の母が家を出て、私たち夫婦と一緒に住むことになったのです。

そのことで私は母と妻、兄弟と妻との間

にはさまれてとても悩みました。しかし私のすることと言えば、ただ一方的に妻を責め、がまんするように言うことだけでした。また家を空けることが多く、お酒を飲んだり、マージャンをしては電話もせず朝帰りをしたり、またある活動で土、日を含む週に3、4日は家を空けることもありました。自分が悪いのは分かっているのですが、妻を責めました。また子供がぜんそくなのにタバコをやめることもできませんでした。ですから夫婦げんかが絶えず、まさに私の育った家庭のようになっていきました。

そんなある日、ある宗教の人が来て聖書についてレッスンを受けていることを妻から聞かされました。その宗教に入るつもりはないが、幸せになりたいから、レッスンを続けて受けたいと言いました。私はその宗教に入らないのなら良いことだと許可しました。そういう努力をしている妻を見ても私は改めようとせず、これで少しは家庭が良くなるかなと、のん気に考えていました。確かに良くなりました。しかし、それは妻だけが成長したのであって、家族としての成長はありませんでした。

ある時、家計が少し苦しかったので妻がアルバイトに出ました。そのアルバイト先で妻は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員と友達になりました。そこで福音を知り、何度か教会に行ったようでした。

ある日、妻はバプテスマを受けたいから一緒に受けて欲しいと言いました。私は猛反対をしました。しかし妻の熱心さに負け、家族全員で教会に行きました。

教会に入った時、私はとても感激しまし

た。それは今まで見たことがない素晴らしい輝きを持った兄弟姉妹、また家族がいたからです。その時、体の底から熱いものが込み上げてきたのを今でもはっきり覚えています。また同時に今までの自分がしてきたことの恥ずかしさで、とてもその場にいる気持ちにはなれませんでした。自分の手で素晴らしい家庭を築こうと決心したのはその時です。間もなく私たち家族は宣教師のレッスンを受けてきました。

私がバプテスマを受ける上で問題となったのはタバコだけでした。宣教師から、神様が助けてくれるからタバコをやめる日を決めなさいと言われ、私はその日が妹の結婚式だったので、11月23日と決めました。丁度その日、私は風邪をひき、とてもタバコを吸える状態ではありませんでした。それ以来タバコを吸うことはありませんでした。そして確かに神様がいらっしゃるといふ証を得ることができました。

それからバプテスマを受けるのに、そう長くはかかりませんでした。1981年11月30日、妻は感激の涙を流し、私たち家族にとって忘れられないバプテスマ会となりました。幸福の扉が開かれたのです。

今では3人の子供に恵まれ、親、兄弟とも仲よく幸福を体一杯に感じながら生活しています。この教会が真実の教会であり、私たちが戒めに従って努力することにより平安と喜びが得られることを証します。

世の中の人々が模範にするような家族になりたいと努力しています。(いしかわ・やすひろ 1952年生まれ、帯広支部第一副支部長)

## 新刊紹介

### 「初等協会 分かち合いの時間アイデア集」



A4変形  
173頁  
1000円

本書には、分かち合いの時間に行なうゲーム、クイズ、劇、お話などのアイデアがたくさん載っている。また、よりよい発表ができるよう、教え方のテクニックも記され、取り外しができるようにルーズリーフ式になっている。

### 「宣教師のための福音学習プログラム」



A4変形  
22頁  
200円

宣教師が伝道期間中に行なう福音学習の課題とその進め方が記されている。レッスンで教えるべき概念が要領よくまとめられており、ステーキ部宣教師の個人学習にも活用できる。

# 読者の ひるば



## 家庭の夕べで

**我**が家がスタートしたのは1973年の6月。早くも9年を経過し、今年の5月には長女がバプテスマを受けました。次女（7歳）参女（4歳）、長男（1歳）を含め、我が家の最大の関心事は毎月曜日にやってくる家庭の夕べです。

家庭の夕べは9年間続けてまいりました。しかし、私の準備不足と未熟さから子供にはあまり楽しいことではなかったようです。母親の手作りのリフレッシュメントには目を輝かせるのですが、テキストのレッスンをしている時に伏目がちになって、おとなしいことがよくありました。いろいろ考えた末、思い切って変えてみることにしました。子供が楽しみに待てるようなプログラムを準備し、その中から自然に霊的な事柄を学べるように工夫しました。

第1週は家族会議。家庭を楽しい所にするために何でも話し合います。

第2週と第3週は「聖徒の道」から子供向けの記事を選び、家族で輪読し、後で感想を述べ合います。子供にはコピーしたものを渡し、専用のファイルに整理させていただきますので、安息日には再度読み、心の備え

をすることにも利用しています。そして、輪読の後には楽しい工作をする約束になっています。

第4週は家族新聞「すくすく」を編集します。長女はカメラマン、次女は記者の割り当てがあるので、どこへ出かけても張り切っているようです。

11月23日は多摩テックへ行きましたが、記事とイラストを子供に任せ、書いてもらいました。新聞のコピーを取り、田舎のおばあちゃん宛の手紙にも同封しました。

我が家の家庭の夕べは、こんな風に定着しつつあります。子供の成長に合わせて変化していくとは思いますが、「聖徒の道」の大管長や十二使徒のメッセージ、また子供向けの話は小さい時から霊的な体験を味わう素晴らしい機会だと思います。

私は20歳までカトリック教会の熱心な会員でしたが、「聖徒の道」のような霊性を感じさせてくれる書物は聖書を除いてありませんでした。なぜなら「聖徒の道」には生ける予言者の私たちへの啓示が記されているからです。最後に、この末日聖徒イエス・キリスト教会が真実の教会であることを証します。（町田ステーキ部町田第1ワード部・葉山茂・33歳）

## 育児に追われる中で

**育**児に追われ、新聞を読むことも、テレビでニュースを見ることも忘れてしまうほどの忙しい毎日を送っています。

郵便受けの前で、届いたばかりの「聖徒の道」の封を開く時、自分の生活の中に、ポッカーと穴のあいた空白の部分があることを思い知らされます。

私がまずむさぼるようにして読むのは、ローカルページです。しかし、そうこうしている内に子供の声で中断となります。正直なところ、全ページに目を通すだけの時間的、精神的余裕はありません。それでも、育児の合間をぬって拾い読む女性向け、母親向けのページから数々の喜びと感動を得ております。

ややもすると霊性が不足がちになる生活の中で、定期的に届けられる「聖徒の道」は私の心の渇きを癒してくれています。(高崎ステークス部越谷支部・類地絹江)

## 楽しいローカルページ

**伝**道から帰って1カ月になりますが、毎月届けられる「聖徒の道」が楽しみです。

12月号のローカルページの山崎健一兄弟の力強い証に思わず涙ぐんでしまいました。

彼にレッスンを施した宣教師は、ふたりとも私の伝道中に同僚として働いた長老たちです。山崎兄弟と苦楽を共にしたふたりの同僚をととも誇りに思います。

私は現在、家族に福音を伝えようとして

いますが、早速この証を両親に見せ、読んでもらいました。両親もこの証を通して福音の素晴らしさを少しでも感じ取ってくれたことと思います。

「聖徒の道」のローカルページはいつも私を励まし、助けてくれます。これから素晴らしい体験談や証をたくさん掲載して下さい。期待しています。(東京北ステークス部志木支部・高橋賢次・22歳)

## 編集室から

- ◎「聖徒の道」を読まれての感想、活用例などのお便りを下さい。「読者のひろば」で紹介します。そのほか、「改宗談」「私の証」「職業と信仰シリーズ」などへの投稿をお待ちしています。
- ◎4月号掲載分締切は、2月20日(TDC必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入して下さい。宛先:〒158 東京都世田谷区上用賀4-9-19/TDC「聖徒の道」編集室。

### 訂正

1982年度12月号31ページの右段5行目「何十人もの……」とあるのは「何千人もの……」の誤りです。おわびして訂正します。

### スポーツ ニュース

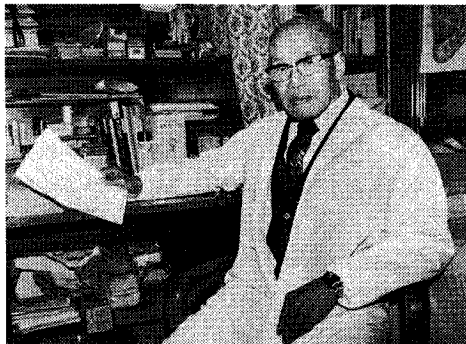
NHK特派員、ソルトレーク・シティを取材

- 3月4日(金) 8:00~8:50 p.m. 放送予定のNHK特集「がん~7つのなぜ~」の番組でユタ州の末日聖徒の生活様式全般を取材し、「ユタ州がアメリカで最もがんの少ない地であるのはなぜなのか」その質問に答える。



科学のお灸で  
アカデミア賞受賞の  
稲垣篤一兄弟(80歳)  
〈18年前にモルモン経から改宗〉

「全国日本学士会のアカデミア賞を受賞する稲垣篤一さん  
（神戸市中央区加納町）の自写」



わなない独特の無痕（むいん）灸。電熱で温めた棒状の治療器の先端にモクサのエキスをつけて皮膚に押しつける。熱と、浸透するエキスで、自律神経を刺激することで、リユーマチ、セソク、脳卒中後遺症などを治療する方法。治療器の温度は、症状などに合わせ十五度から四十九度の範囲内で調整するようになっており、普通のお灸と違って熱さは全然感じない。

昭和二十二年に鍼灸師になった稲垣さんは、お灸が苦痛を伴い、皮膚に跡を残すだけてなく、その高熱が本来の効果を低下させているのではないかと考え、改善の研究に着手した。二十五年から九年間、京大医学部でモクサの成分の分析や動物実験、熱刺激

**現** 在神戸ステーキ部高等評議員の稲垣篤一兄弟（80歳）が、熱い灸を一変させた無痕灸の科学性が世に認められ、全国日本学士会から教育、学術、文化、産業部門の特殊な研究家に贈られるアカデミア賞を11月27日に受賞した。

「アカデミア賞は神様からのクリスマスプレゼントでした。何の価値もない私に、もったいないと思っております。何よりもうれしかったのは、晴れの場所で、クリスチャンとしてキリストの名を証する機会があったことです」と語る稲垣兄弟はどこまでも謙虚だ。



「9年がかりでしたが、中国から伝わった熱い灸を一変させた無痕灸の科学性が世に認められて本当にうれしい」と語る稲垣篤一兄弟。写真は11月27日の受賞の日、奥様の三枝姉妹（67歳）と。

# 科学のお灸で アカデミア賞

神戸の鍼灸師稲垣さん

## 東洋医学に新領域

熱さ感じず跡形残さぬ

独自の治療法を開発しながら、お灸の研究に取り組んでいる神戸市内の鍼灸（しんきゅう）師に、二十七日、社団法人・全国日本学士会（本部、京都）の五十七年度アカデミア賞が贈られる。三十五年間の研究で、東洋医学に新領域を開いたとして、その功績を認められたもので、今年八十歳になる鍼灸師は「お灸の科学化を目指して、また充実に張りたい」と張り切っている。

神戸市中央区加納町一ノ一が生理面し及ぼす影響の研究を続けている。

（一）、東洋医学健康クラブ「研究」を行い、「稲垣式」を考へ、稲垣さんは「鍼灸は近年、

診療所経営、稲垣馬さん案。実際の治療に取り入れ、随分脚光を浴び、研究も盛んで、教育、学術、産業などを

効果を見ながら治療器に改良「になっているが、古典的治療分野から選ばれた九人七人も

を加えるなど、今も研究活動「法を踏襲している」過ぎない

（二十七日午前、京都・都ホテルで行われる授賞式に臨む。

稲垣さんが開発したお灸は

彼と末日聖徒イエス・キリスト教会の出会い、18年前に当教会の宣教師が治療のために彼の診療所を訪れた時にさかのぼる。宣教師や牧師からは治療費を受け取らないとして拒否した時に、それじゃあと置いていったモルモン経を読み、いたく感動したことがこの教会へ足を向ける発端となった。それまでプロテスタント教会に集って、イエス・キリストへの信仰を表明していたが、教会内のいざこざを目にし、教会から遠ざかっていた。

「聖書の解釈がいろいろあって難解であり、納得しにくいことが多かったのですが、モルモン経を読んだ時にすんなりと理解できて、骨の髄にしみわたるように心にしみました。かんでふくめるように親が子に説教する所、王が人民に説教する所など実に明瞭に記されていて、聖書のようにどのように解釈したらよいかとの疑問がわくことがありませんでした。文字通り読んでよく理解できたのです。」

やがて教会に集うようになり、教会の明るい雰囲気至今已の教会にない温か味を感じたという。

約1年前からスポーツ施設にほぼ毎日通い、バーベル上げに汗を流している。無痕灸を全国津々浦々に広めるためにも頑張らなければと体力づくりに精を出している姿は、「老いてますます壮なるべし」の言葉通りである。

部分もある。アカデミア賞によって、私のお灸の科学性と先進性が認められたことが何よりうれしい」と話し、授賞式には獣医師をしている息子さんを合め、家族全員で出席する、と目を細めている。

昭和57年11月27日付  
神戸新聞

(57. 12. 12付の朝日新聞でも紹介された)



故リグランド・リチャーズ長老  
（十二使徒定員会会員）

リチャーズ長老は、この神権時代における教会歴史の実に半分以上を生きたことになる。その生涯はジョン・テイラーからスペンサー・W・キンボールまで、10人の大管長の在任期間に及んでいる。